
God and World

佳春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

God and World

【コード】

N8855W

【作者名】

佳春

【あらすじ】

長きにわたる神と世界の戦い。

救世主に選ばれた四人の運命。

四色の悲しき過去。

白き王と赤き騎士と青き研究者と黒き犯罪者。

世界は、救世主は神に勝つことができるのか。

人間は、神から世界を取り戻すことができるのか。

序章

この世界は四大陸から成っている。

そして、その大陸にはそれぞれ大国が中心に位置している。

第一大陸、ハイラハドム。

この大陸には神聖帝国ヴァイス。

第二大陸、クラハトウ。

この大陸には軍事国家ヴェルメリオ王国。

第三大陸、ソムニウム。

この大陸には技術先進国家アスール皇国。

第四大陸、オプスキュリテ。

この大陸には犯罪国家シュヴァルツ共和国。

ヴァイス・ヴェルメリオ・アスール・シュヴァルツの四国の名前は色を表している。

ヴァイスは白を。

ヴェルメリオは赤を。

アスールは青を。

シュヴァルツは黒を。

世界はこの四国を滅ぼすことは出来ない。

この世界に伝わる古文書にはこうある。

『世界は元々一つであった。

しかし、人間に怒った神は世界を四つに切り裂き、離れ離れにした。

それでも神の怒りは収まらない。

神はその四つに分かれたそれぞれの世界に杭を打ち付けた。

一つは白い杭。

これは天と世界を繋ぐ門を封印するもの。

一つは赤い杭。

これは人の血によってのみ解かれる地獄の門を封印するもの。

一つは青い杭。

これは人の欲望によってのみ開け放たれる異界の門を封印するもの。
一つは黒い杭。

これは人の心の闇によってのみ開かれる冥界の門を封印するもの。
この四つの杭がある限り、四つの世界は壊れない。同時に、干渉し
あうこともできない。

そして、その四つの杭がある国は自国に杭の色の名前を付け、護り
続ける。

もし、この杭が世界から抜き放たれば、世界は四つの門に挟まれ、
時空の奥底へと消えてしまう。

そして、人は大陸一つ一つに名前を付けた。

白い杭のある大陸には聖域の名を持つハイラハドム。

赤い杭のある大陸には力を意味するクラハトウ。

青い杭のある大陸には夢を見るソムニウム。

黒い杭のある大陸には闇を求めるオプスキュリテ。

この四つの大陸が再び一つになる時、神に対抗しうる力を持った救
世主が四人現われるであろう。

この四人は世界の命運を握る。

この四人は世界を壊すのか、救うのかそれは誰にも分からない。
ただ、分かるのはこの四人は世界に選ばれた存在だということ。

この四人が現われし時、四大陸の中央に強大な大陸が現われる。

中央大陸、デウスカステロ。

神の城。

そこに行き、世界の調和を取り戻すのだ。

世界は神から人間の元へと帰るときなのだ。

預言者 『アヴニール』

アヴニールという預言者は大陸と大陸を隔てる大きな海にこの古文
書たる預言書を流した。

これにより、各大陸の歴史が確立し、他大陸のことを知ることができた。

神が世界を切り裂いてから二百年後に初めて、世界の歴史が動き始めた。

世界は時を巡る。

本当の救世主たる四人が現われるまで。

第一節 1話

「陛下！ このままでは我が軍の兵が犬死になってしまいます。どうか、撤退命令を！」

神聖帝国ヴァイスの印を胸に付けた白い鎧を着た一人の男が、陛下と呼ばれた中年を過ぎ老年に入ったばかりの男に跪きながら懇願している。

「黙れ！ このまま進み、我ら天の国たるヴァイスに手を出す愚か者の国を滅ぼしてしまえ！」

陛下と呼ばれた男は手を高く掲げ、進軍命令を出す。

「お待ちを！ 失礼ながら申します。敵軍の総数は確認したただけでも五万です。それに敵軍は続々と援軍を呼び続け、さらに増える模様です。ですが、それに対抗する我が軍はたったの三万なのですよ？ この少ない兵のまま敵軍の本隊と激突すれば確実に我が軍は負けます。どうか、お考え直しを！」

跪く男は目の前の陛下と呼ばれた男を見る。

「この戯けが！ それでは意味がないのだ。この少ない兵で勝つてこそ近隣諸国を簡単に手中に収めることができる最善の策なのじゃ。わかっておろう、リダラ」

「ですが、それではあまりに被害が大きすぎます。もう一度お考え直しを！」

リダラは額を床に擦りつけるように懇願する。

「くどいわ！ 被害などどうでもいいのだ。いくら兵が死のうと構わん。この戦に勝てればな」

王の男は踏ん返り返って、嘲笑う。

その態度や言葉にリダラは怒りを覚えた。

「あなたは一体どれだけの兵を殺すつもりですか。この戦いが始まってからすでに一万以上の兵が死にました。その中にはあなたの弟君もいたはずです。弟君を守っていた私の部下も死にました。あな

たは弟君が死んでもまだこの戦いをやめないといいのですか」

「ふん。あれは間抜けなだけよ。まあ、この戦いに勝てればそれが一番の供養となるう。お前の部下は運がなかっただけの話だ」

王はリダラの言葉を聞いても意に介さない。それどころか、死んで当然という風情だ。

それを見た、リダラは怒りの形相で王を睨む。

「貴様・・・死んだ者たちへの態度かそれは！ 死んだ者たちの中にはあなたを慕っている者もいたというのに。その者たちの死を悼みもしない王など、この国の王に相応しくない。私は、今を以てこの軍を辞める。だが、辞める前に言いたいことをすべて言わせてもらおう」

リダラは一呼吸を置いてから、

「戦の何も知らないくせに戦場にしゃしゃり出てくるな！ 貴様は城でガタガタと震えて勝利の知らせが来るのを待ってればいいのだ。それに貴様のせいで死んだ者たちを愚弄したな。死者を冒瀆するなどこの神聖帝国ヴァイスの名に恥じる最も忌むべき行為だ。貴様がこの国の王でいる限り、この国に平和が訪れることはない。だから・・・今ここで貴様の命を消してくれる！」

リダラは腰に差していた剣をスラリと抜くと、王のもとにゆっくりした足取りで歩いていく。

「わ、わかった。この軍の指揮権はお前に託す。それでいいんだらう？」

「・・・」

「何が望みだ。地位か？ 金か？ なんでも与えるぞ？」

「・・・」

「く・・・私が一体何をしたというのだ」

「・・・」

王は壁に追い込まれた。

リダラは王の言葉を見殺しして、剣を振り上げる。

「この・・・血迷ったか！ 誰が、ここまで育てたと思っている！」

「恩を忘れたか！」

「貴様に、育てられた覚えも恩もないわ！」
剣を振り下ろす。

「ぎいあああああああああ……」

鈍い音がして、王の首が落ちた。

王の断末魔が部屋に響く。

「地獄で死んだ者たちに詫びるがいい」

王の首に向かって言うと、剣の血を振り落としながら、部屋を出た。その姿は、王の鮮血で白い鎧が赤く染まっていた。

部屋の外にも一面に赤が広がっている。

愚かな王のせいで殺された者たち。

それをリダラは悲しそうに眺め、歩き出す。

そして、辿り着いたところは広く開けた広場だった。

そこには、ヴァイス軍の兵たちが喜びの表情で集まっていた。

「おお。閣下がやってくれたぞ！ これで俺たちは自由だ。これで、これで俺たちは命を散らす必要はないんだ！」

と、一人の兵が叫ぶ。

それと同時に広場中に歓声が上がリ、兵たちが抱き合ったり、踊りだしたりして喜びをあらわにしている。

それにリダラは顔を綻ばせていたが、すぐに顔を引き締め、近くにいた側近の部下に現状を聞く。

「残党は？」

「王派の者たちは一人残らず粛清しました」

「そうか」

苦々しそうな顔をして、少し俯いた。

「それにしても、陛下の計画通りでしたね」

部下が少しおもしろそうに言う。

「ああ。あの王は愚かすぎたんだ。少しでも意思を変えれば、命だけは助けてやったんだが……」

「無駄ですよ。あの馬鹿な王は意思を変えません。それはわかって

いたことでしょうか？」

「そうだな。ラフラ」

「はい」

ラフラは嬉しそうに返事をする。

「閣下。どうやら、敵軍が進軍を開始したようです」

ラフラが前線のほうに上がった光を見て言った。

「数は？」

「本隊を含めると、六万強です。敵軍は我が軍の本隊を潰すつもりでしょう」

ラフラは前線の方向を見ながら、報告する。

「わかった。とりあえず、態勢を整えるために退くぞ」

「は！」

ラフラはそれを了解すると、指示を飛ばし始める。

兵たちはラフラの指示通り、反転して退却を始める。

それを見ていたリダラは馬に乗り、兵たちとは逆に敵軍に走って行った。

「閣下、本当に大丈夫ですか？」

ラフラが心配そうについできた。

「大丈夫だ。任せておけ。あいつらはお前に任せた。」

「了解しました。・・・絶対死なないくださいね。あなたは新たな王になるのだから」

「ああ」

ラフラはその返事を聞いたら、微笑み全速力で引き返した。

その背中にリダラは笑うと、馬の速度を上げ敵軍に向かっていく。

第一節 1話(後書き)

リダラ(riddler)はオランダ語で騎士という意味。

第一節 2話

リダラは敵軍を凄まじい速度で駆け抜け、本隊の指揮をしている者のところに着いた。

その指揮官の前で馬を降りる。

本隊の指揮官のところに現れたリダラは当然、兵に囲まれ身動きが取れなくなる。

だが、それでもリダラは平然と指揮官のもとへと歩いていく。

指揮官は動じもせず、目の前に迫ったリダラを睨む。

「私はあなたを殺しに来たものではありません。私はあなたがたシュトリア連合国と同盟を組むために来たのです」

リダラは指揮官の前に跪くと、胸に手を当て、本当に攻撃する気は無いのだとアピールする。

「ふん。誰がそのような申し出を受けるか。ヴァイスの者どもは皆敵だ」

「これでも・・・ですか？」

リダラは王の首を掲げる。

「これでもですか？ 先ほど、私がこの王の愚かさに失望して殺してきたところなのです。そのため、この通り鎧が汚れてしまっていますが。ああ、そうです。この王を殺したのは怒りに任せてではありませんよ。計画を立てていたのです。王を殺すことを。この王には跡継ぎはいない。それどころか、王族は一人として生き残ってはいない。そして、今最も王位に近いのは私です。この王の弟君と約束をしていたので。さあ、どうでしょう？ この私と同盟を組みませんか？」

リダラは掲げていた王の首を無造作に地面に置くと、手袋を外し、手を差し出す。

「同盟を・・・結びませんか？」

リダラは指揮官に微笑みかける。

それに指揮官は微笑み返した。

「ふん。面白い、いいだろう。私こそ王を殺したいと思っていたのだ。どうだ、同盟を結ぶ代わりに、シュトリア連合国の王族を殺してはくれないか？ そうすれば、同盟を快く受け入れよう」

「いいでしょう。ですが、その言葉違えた時にはシュトリア連合国がこの世界から消えますよ？」

「違いはせんわ。このような強大国に牙を向けるほど私は馬鹿ではない」

指揮官の男はリダラの差し出された手を握った。

「そうですね。なら、同盟を結ぶためにあなたがたの王には・・・死んでもらいますようか」

そう言つて、リダラは微笑む。

「ああ。王は今、王城でガタガタと震えているだろう。簡単に殺せるはずだ」

指揮官は城のほうを指す。

「シュトリアの王は聡い方のようだ」

「そうか？ 強欲で傲慢だぞ」

「いえ。戦場に出てこないのは賢明な判断です。もし、戦場に出れば我が王のように殺されていたかもしれません」

リダラがフフと笑う。

「だが、これから、貴殿が殺すのだろうか？ なら、あまり変わりはないと思うが・・・」

「いえいえ。戦場にはほとんどの兵が出兵していますから、警備が手薄になりますし、殺しやすい。それに戦時中に王城で殺されるのは悪評が広がっていいじゃないですか」

「確かにな。歴史に名を残すのもおこがましい王族だったが、悪評として残るなら清々する」

「でしょう？ おっと、そろそろ行かないと、部下が心配しますね」
リダラが焦るように馬に乗る。

「では、シュトリアの王族を・・・殺してきます」

リダラは指揮官に微笑みかけると、シュトリアの王城に向かって馬を駆けさせる。

それを指揮官は見送った。そして、リダラの姿が見えなくなると、「・・・あんな化け物を相手にできるか」と小さく呟き、全軍を後退させた。

リダラは一人、馬で走っていた。

一人でシュトリア連合国の王族を殺すために。

リダラは指揮官に言われたルートではなく、兵に見つかりにくい別のルートで行く。

そのルートは兵に見つかる可能性が大幅に低くなるが、死ぬ可能性が格段に上がる危険な道だった。

その道は海に隣接している断崖絶壁だった。

一歩、踏み外せば確実に死ぬ道だ。

その道をリダラは迷いなく馬を全速力で走らせる。

その断崖絶壁を走っている馬はリダラとは対照的に怖いのか震えている。

それでも、リダラは馬を強制的に走らせる。今、止まることのほうが危険だからだ。

「もうちよつとだ。頑張ってくれ」

リダラは優しく馬のたてがみを撫でる。

その言葉通り、すぐに断崖絶壁の道から普通の山道に戻った。

その山道はシュトリア連合国首都の王城の真後ろにある為、城の警備が丸見えである。

「外には二十人とちよつと。何とかなる数だな」

リダラはそういうと、馬で突っ込んだ。

外にいた警備兵はその突然の登場に驚き、騒ぐこともしない。

だが、徐々に非常事態だと理解すると警備兵が剣を抜いて、リダラに向かってくる。

しかし、リダラは剣さえも抜かず、向かってくる兵をじっと見据えている。

「うわああああああ！」

警備兵の一人が叫びながら剣を振り上げる。

そして、振り下ろす。

だが、その剣の先にリダラはいない。

リダラはその人物の背後に立ち。その警備兵の首筋をトンツと手刀で叩き、昏倒させる。

「弱いな」

リダラは昏倒した兵を見下ろすと剣を抜き、その人物の首のすぐ隣に突き刺す。

「死にたくなければさっさとここから去れ」

リダラは横目で兵たちを見据える。

それに体を震わせた兵たちは武器を捨てて逃げ始めた。

「この国の人間は腰抜けだな」

リダラはそう吐き捨てると、地面から剣を抜き鞘に納め、王の間に向かって歩き出した。

途中で事態を把握した警備兵に襲われたが、それらも次々リダラの剣の餌食となっていく。

一步一步、王の間へと近づく。

近づくたびにリダラの表情がなくなっていく。

そして、王の間の入り口に辿り着いた。

王の間の扉は先ほどリダラが殺した衛兵の血で赤く染まっている。

その時にはリダラの表情は皆無だ。それどころか人形のように瞬きさえしない。

リダラは王の間に入っていく。

中では王とその妃、王の子供たちがいた。

子供たちはリダラが何者か知らないまま無邪気な笑みを浮かべ近寄ってくる。

「おじちゃん遊んで遊んで！」

子供たちがリダラの足にしがみつく。

本当に何も知らない子供だ。

それでも、リダラには関係ない。

今のリダラはただ、任務を遂行する殺戮人形のようなものだ。

同盟を組むためなら女子供、たとえそれが自分の家族であろうと殺すことができる。

その覚悟がリダラにはある。

だから、自分にしがみついて裾を引っ張っている子供の首を刎ね飛ばし、殺した。

それを見ていた妃が叫び声をあげる。

それに王は言葉を失っている。

リダラはゆっくりと視線を子供から王と妃に向ける。

妃はリダラと目が合った。

それから妃は血の気が失せたように床にへたり込み、涙を流している。

王は何かを呟いている。

「私はどうすれば・・・私の大事な子供たちが殺されてしまった。

どうすればどうすればどうすれば・・・」

リダラはゆっくりと王と妃に近づく。

その度に妃の体が震える。

「あなた方は私に殺されればいいんですよ。この世界のことを思うのなら」

リダラは王と妃に近づくと子供の血で濡れたままの剣で二人の首を刎ねた。

「さようなら。シュトリア連合国王ガールマ・ルシエル・シュトリア・・・伯父様」

リダラは首だけの王に挨拶すると王の間を出た。

その時、外から声がする。

「我が王は死に、古きが去った！ 今や我がこの国を導かねばならなくなつた。今から新しき者がこの国の王となるのだ！」

その言葉に答えるように歓声が聞こえる。

リダラが外に出てみると、先ほど同盟を組むと約束した指揮官が剣を高く掲げ演説をしていた。

リダラが出てきたことに気付いた指揮官の男が、

「おお、出てきたぞ！ 我らが英雄、我らが同盟を組みし神聖帝国ヴァイスの新王だ！」

と言い、リダラに手を差し伸べる。

「ありがとう。我らを解放していただいて。そういえば、名乗っていなかったな。私の名前はルアル・タツアードだ。よろしく」

「私……いや、俺の名前はリダラ・イグレスシアだ。後程ちゃんとした格好でこの城を訪れよう。その時、正式の同盟を結ぼう」

「ああ。これからどうする気だ？」

「俺は一度、城に戻りすべて終わらせてくる」

リダラは自分の馬のもとまで歩いていく。

「リダラ。また後でな」

リダラは馬に乗り、うなずくと、馬を進める。

その時、城から見られている気がして振り返った。

だが、見た先には誰もいなかった。

「？」

リダラは不審に思いながらも、ルアルに軽く手を振ると、馬を走らせた。

リダラは馬を走らせながら、悲しくて苦しそうな複雑な顔をしていた。

「……何故、我らは戦を好み、血を流す。たくさんの涙を流してまで手に入れる価値のあるものなんてあるのだろうか。俺は……何故、殺した？ 殺してまで何を手に入れようとした？ 国か？

権力か？ 富か？ そんなの俺には必要ではない。俺にとって必要とはなんだ？」

リダラは自問自答を繰り返していた。

「何故・・・みんな争いを止めようとしらない？ 争って手に入れられるものなどたかが知れているのに。なのに・・・なんで、俺は・・・」

リダラは馬を止めて涙を隠すように手で顔を覆う。

「・・・俺は・・・何のために・・・？」

リダラは泣きながら考える。

その時、遠くから馬の蹄の音が聞こえてきた。

リダラは急いで涙を拭くと音のするほうを見る。

「閣下！ 大変です！ シュトリアが攻めてきました！」

第一節 3話

馬に乗ってやってきたのはラフラだった。

「そうか・・・」

リダラは呟くように頷くと、馬を走り始めた。

「どうしますか？」

ラフラが付いてきながら聞く。

「シュトリアを・・・消す」

リダラは苦渋の表情で前を見据えながら答える。

「了解しました」

「首謀者は誰だ？ まさか、ルアルが裏切ったわけではあるまい」
並走するラフラに聞く。

「首謀者はルアル殿ではありません。ルアル殿は何者かに暗殺され、今、シュトリアの主導権を握っているのは王佐だったスウアルツ・ネルヴィという人物です。そのスウアルツ・ネルヴィはシュトリア軍を指揮し、ヴァイス軍を攻めています」

ルアルが殺されたと聞いたリダラは一瞬困惑した。

「俺が去った後すぐに殺された・・・？」

リダラは頭を抱え、シュトリアの王城での光景思い出す。

「・・・あいつか？」

王城で見られている気配がしたのを思い出し、あの気配がルアルを殺したのだとなぜか、すんなりと理解した。

「あいつとは誰です？」

ラフラが訝しげに聞いてくる。

「シュトリアの王城を出るとき、誰かに見られている気がしたんだ。そいつがルアルを殺したんだろう。何故だかそんな確信がある」

「閣下の勘はなぜか良く当たるので、多分そうなんです」

「なぜかは余計だ」

リダラの返答にラフラは笑う。

その時、背後でたくさんの馬の蹄の音が聞こえた。その音に気付いた二人は振り返る。

そこには三万を超すほどのシュトリア軍が旗を掲げながら馬を駆っていた。

「閣下！」

「お前は急いで戻れ。お前が指揮を執つて軍を率いて来い！」

リダラは馬を反転させ、シュトリア軍を見据える。

「閣下は？」

「俺はここでシュトリア軍を食い止める。時間を稼いでいる間に兵を連れてこい」

リダラはシュトリア軍から視線を逸らさないまま、剣を抜く。

「閣下。無茶を言わないでください！」

ラフラがりダラと同じように馬の向きを反転させる。

「さつさと行け！」

リダラが怒鳴る。

「いいえ、行きません。これ以上閣下に無茶をさせるわけにはいきませんから」

ラフラも剣を抜く。

「お前……」

「大丈夫。城にいる兵には伝えます」

ラフラはそういうと、魔呪を唱え始めた。その唱えた言葉が眼前に集まり、上に打ち上げられた。

上に打ち上げられた魔呪は空で強い光を放ち、消える。

「閣下はお好きに動いてください。私が閣下を援護します」

ラフラはリダラに不敵な笑みを向ける。

それにリダラは心底面白そうに口角を吊り上げ、剣を構えながら馬を突進させる。

「行くぞ！」

リダラは叫びながら敵陣に突っ込み、剣を振る。

そのたびに血が飛び散り、敵が倒れる。

敵を薙ぎ倒すリダラの背後に魔呪を唱える人物がいる。それをラフラが魔呪で切り裂く。

ラフラの存在に気付いた兵がラフラに近づいてくる。だが、それをリダラが突き殺し、ラフラに笑みを向ける。

「お前の援護は俺がやる」

リダラはそういうと、また敵陣に突っ込んでいく。

「援護は私の役目だって、言っているでしょう！」

ラフラは唱え済みだった巨大な魔呪を敵陣に向かって放つ。それに気付いたリダラは敵陣から後退する。

リダラが後退した瞬間にラフラの唱えた魔呪が敵陣に直撃し、地響きとともに大きな穴が開いた。

その魔呪によって、一万ほどの兵が押し潰された。

ラフラはすぐさま他の魔呪を唱え始め、それと同時に手でも魔呪を描く。

魔呪が消えた瞬間にまた敵陣にリダラは切り込んでいった。いつの間にかリダラは馬に乗ってはいなかった。

おそらく敵に攻撃される前に馬から降りたのだろう。

「うおおおおおおおお」

リダラは叫びながら剣を振る。

敵の血によってリダラの鎧の色が赤から黒に変わっていた。

リダラの剣は常に赤く、切れ味が変わった様子はない。

それどころか、切れ味が上がっている。

剣は血色に紅く輝き、敵を屠っていく。

シュトリア軍の旗は自国の兵の血によって紅く染まり、侵されていく。

まるで今のシュトリアを如実に表しているかのよう。

リダラの手によって数千の命が散っていく。

ラフラの手によって数千の命が塵に変わっていく。

いまや、リダラとラフラの二人だけで先遣隊の三万を超す軍は壊滅。その後ろに続いている本隊の数万の兵が二人によって消えていく。

シュトリア軍の上層部にいるであろう人物たちは逃げ始めていた。下っ端の兵はその逃げ始めた上司を護るために戦い続ける。その様子にリダラは複雑な顔をする。

「何故……」

リダラは今にも泣きそうな顔をしている。

「閣下。これが世界の姿ですよ。新王となるなら耐えてください。こんなの……私だって嫌なんですから。どうか……閣下は耐えてください。今は……今だけはこの戦いに集中してください」

「……ああ。今は、これに勝つことだけを考えよう」

リダラは背後で俯いているラフラの頭をぼんぼんと叩き、剣に付いた血を振り落とす。

「まだ、敵はあんなにいるんだ。やれるな？」

ラフラは顔をあげ、笑みをつくる。

「……当然です。私はあなたの部下ですから」

ラフラは手で魔呪を描き始める。

「よし。なら行くぞ」

リダラも笑い、敵に突っ込んでいった。

「……閣下！ ラフラ隊長！ ご無事ですか？」

背後から馬の蹄の音とともに明るい部下の声が聞こえた。

「閣下。我がヴァイス軍が来ました！」

ラフラが歓喜の表情で敵と交戦しているリダラに叫ぶ。

「おお、来たか！」

リダラも戦いながらラフラのしている方向を見る。

「閣下！ 参戦します！」

たくさんの声が聞こえた。

たくさんの仲間の頼もしい声が聞こえた。

その声にリダラは一瞬、内心ほっとしたがすぐに気を締め、

「よし。第一部隊は剣で応戦。第二部隊は第一部隊を魔呪で援護。

第三部隊は遠方で本隊の指揮官目掛けて攻撃。第四部隊は敵の背

後に回り込み背後から攻撃。第五、第六部隊は好きに暴れる。そして、絶対に命を散らすな！」

「はっ！」

兵たちが同時に返事をし、リダラの指示通り動き始める。それをリダラは後退しながら見守る。

リダラのそばにラフラが寄ってくる。

「なかなかの結束力ですね。さすがは閣下、人望が厚い」

ラフラは感心しながら笑う。

「ははっ。そんなんじゃないさ。俺があいつらを頼っているんだ。

それにあいつらが答えてくれているだけだよ」

リダラは前方で交戦している兵たちを見て微笑む。

「それでも閣下でなければ答えてはくれなかったでしょう。だから、

閣下はお好きに動いてください。心の赴くまま動いてください。私

たちが閣下の道を照らし、閣下を支えましょう」

ラフラがリダラに向かって微笑んでいる。

「ふ、ふふ、ふははははは。やはりお前たちはいい奴だ。こんな俺

についてきてくれるなんて。面白い奴らだ！」

リダラは口を大きく開けて笑う。

急な笑い声に敵も味方も驚いたのか、こちらを向く。

「ならばその期待に答えねばなるまい。いいだろう。その期待を上

回る働きを見せてやる！」

リダラは剣を強く握りしめ、走り出す。

敵は驚いてすぐさま進行を阻止しようとするが、リダラの勢いに負

けて腰が引けている。

「閣下が続け！」

走っていくリダラを見て、ヴァイス軍の兵は奮起した。

リダラは敵に構わず、シュトリア軍総指揮のスワアルツ・ネルヴィ

のもとへと向かう。

シュトリア軍は徐々に後退する動きを見せている。

それでも構わずにリダラは走る。

体力が続く限り走る。

走るリダラの背後にはヴァイス軍が続いている。それぞれが敵を蹴散らしながら進む。

「どけどけ〜！」

兵たちは剣を振らずに怒声だけで敵を蹴散らす。

リダラは進行速度の速さと剣の紅く輝く様で威圧し、道をつくる。

シュトリア軍はヴァイス軍の猛攻に負けて、逃亡を始める。

いつの間にかリダラの前方には逃亡しているスウォルト・ネルヴィと他の幹部の姿が見える。

リダラはそれに一層速度を速め、スウォルトに接近する。

それに気付いた護衛兵が叫びをあげる。

その護衛兵の見える先には、たくさんのヴァイス軍が走ってきていた。

先頭にいる男は黒い鎧を纏い、紅く輝く剣を持っている。

その男の顔には笑みが浮かんでいた。

その姿に畏怖したスウォルトは馬を叱咤して逃げ始める。

それにラフラが、

「第二、第五部隊、敵の前方に広範囲魔呪展開！ 第一、第六部隊、敵の馬を狙って攻撃！ あいつらの足を無くせ！」

リダラはその間もスウォルトに迫る。

スウォルトは逃げる。

だが、第二、第五部隊の広範囲魔呪によって前方を塞がれてしまい、逃げ場を失う。

その隙に第一、第六部隊が馬の脚の腱を断つ。

広範囲魔呪によって視界が悪くなったところから第四部隊が合流し、スウォルトら数名は取り囲まれ、降伏した。

「さっさと殺せ。血に塗れたる国め！」

スウォルトは王佐とは思えないような暴言を吐く。

「殺しはしない。だが、殺す」

リダラはラフラにしかわからない単語を言う。

それにラフラは頷くと魔呪を唱える。

その魔呪はスウアルツの体に纏わりつき、焼印を刻む。

「それは、お前の精神を拘束するもの。お前はこれから苦しみにも
だえ続け、最後まで世界をみてもらう」

ラフラの唱えた魔呪は神聖帝国ヴァイスでは禁呪とされている魔呪
だった。

この魔呪は対象の精神に鎖をかけ、徐々に締め付け、壊していくと
いう精神破壊の魔呪だ。

「殺さないつもりか？」

スウアルツはリダラを睨む。

「ああ。お前の命は必要としていないからな」

「必要じゃないなら殺せ！」

「そういう意味じゃない。殺す必要のないという意味だ。お前が心
の底から死にたいならそうしてやらんこともないが……」

リダラは爽やかな顔でスウアルツを見る。

「……ふん。いいだろう。この世界を見続けてやる。お前が死ぬ
までな」

スウアルツはそう言い、リダラを真剣な目で見る。

「それは助かる。自分の死の瞬間に審判がいるといい」

リダラはスウアルツに微笑むと兵を引きかえらせる。

「よし。城に戻るぞ！ 全軍準備を開始し、各部隊ごとに城に戻れ
！」

リダラは兵が戻っていくのを見ると、満足そうにスウアルツを見る。

「お前にだけは俺のすべてを話しておく。そのほうが審判しやすい
だろう？」

そういって、リダラは不敵な笑みを浮かべる。

リダラはラフラが見つつけてきた愛馬にまたがり手を振りながら、手
紙を出すと告げると、ラフラとともに去って行った。

これがシュトリア連合国との戦争の終結を意味していた。

第一節 3話（後書き）

魔呪・・・魔法のようなもの。発動方法は詠唱型と刻印型がある。主に使われるのは詠唱型。（魔呪は言葉で形成されているため、手で描くよりも声に出したほうが早い）

禁呪・・・使用を禁止されている魔呪。

遠方具・・・遠距離攻撃ができるもの。

第二節 1話

リダラが王になってから一年が過ぎた。

この一年で第一大陸ハイラハドムでヴァイスを攻めようとする国はなくなった。

事実上、リダラがこの大陸の覇者となった。

だが、今でも地方では内乱や紛争、略奪が起きている。

その一つ一つにリダラは赴き、沈静化させる。

しかし、リダラが王になってからも問題が起きていた。

「陛下！ 陛下！ どこです？ どこに行かれましたか？」

リダラに妃が付き、毎日のように追い回されているという問題が。

「どこに行かれたのですか？」

その妃の女性は綺麗な金色の髪を振り乱しながら探し回る。

「もう！ どこに行ったのかしら？」

その女性は髪を梳きながら、頬を膨らませる。

その横の部屋の中で、息を整えている姿がある。

「まったく。ラフラに聞いてみましょう」

女性の声が遠ざかっていく。

そして、女性の気配が消えるとその息を整えていた人物が安堵の息を漏らす。

「はあ。なんであいつはいつもいつも追いかけてくるんだ？ 戦場

に出るよりも疲れる・・・」

リダラは立ち上がると、窓の外を見た。

外ではラフラが妃に問い詰められて、困惑していた。

それを見ているリダラに気付いたラフラがチラチラとこちらをみて、助けを求めるが、リダラは手を合わせて、ごめんなと視線を送ると

部屋を出る。

部屋の前ではメイドや兵がせかせかと動き回っている。

それもそのはず、今夜、戴冠式とともに結婚式を執り行うからだ。

この一年、リダラは前王の後始末に追われて戴冠式を行う暇がなかった。

そして、かねてより婚約していた妃との結婚も後回しになっていた。それに妃は微笑むだけで不満も何も言わなかった。

「はあ・・・今夜、なんだよな・・・・・・面倒だ」

リダラは執務室への廊下を歩きながら、溜息をつく。

「なんて言葉を吐くんですか。もう探しましたよ！」

振り返ってみると、毎日毎日リダラを追いかけまわしている女性が腰に手を当てて立っていた。

「ファム・・・なんでここが・・・」

リダラが顔を引きつらせながら言う。

「ラフラに問い詰めました。まったく、今夜なのですよ。きちんとしてください」

リダラは小さく舌打ちした。

ファムは人差し指を立てながらリダラに詰め寄る。

「いいですか？ あなたはこの神聖帝国ヴァイスの新王なのですよ。そんなことを言っていたら近隣諸国になめられかねません」

「そう言ったって、俺は根っからの戦人なんだ。こんなのは不慣れだ」

リダラは今夜のことを考えて心底嫌そうな顔をする。

「そんなのは関係ありません。今夜の行事を成功させればよそれでよいのです。その後はお好きに。本来ならば王が引き受けるべき書類仕事は私が引き受けますから」

ファムは優しそうな微笑は受ける。

「・・・・・・結婚式だけでは駄目か？」

「駄目です」

即答で拒否された。

「・・・なら、我慢してやるう」

リダラは書類仕事をしなくて済むならと考え、渋々頷いた。

「それでいいのです」

ファムは笑みをさらに深くする。

「では、行きましょう」

ファムはリダラの腕を掴み、引っ張るように歩き出す。

「は？ どこに？」

リダラは引っ張られるままキョトンとした顔をする。

「どこって衣装室です。衣装を合わせねば始まらないでしょう」

「俺はこのままでいい」

「駄目です。王としての威厳と品格の漂う衣装を身に纏わねばいけません」

ファムはどんどんリダラを引っ張っていく。

「まったく。今日やっと衣装合わせができます。今までどれだけ大変だったか。あなたはすぐに居なくなってしまうので、捜すのに苦労しましたよ」

リダラははつとする。

「もしかして・・・毎日毎日俺を追い掛け回していたのはこれのためか？」

リダラはファムに問いかける。

「当然でしょう。それ以外の理由が何処に？ あなたが忙しいのは存じています。只でさえ疲れている体に鞭を打つ気はありませんよ。ファムは必ずするとリダラを引きずる。

「そろ・・・そろ・・・歩いて、貰えますか・・・？」

ファムは徐々に息が切れてきたのか、綺麗な髪が乱れている。

「ああ」

ファムはリダラを放すと、しゃがみこんでしまった。

「大丈夫か？」

「はあはあ・・・大丈夫です」

肩で息をしているファムの顔色をうかがう。

「本当か？」

「本当です。少し、苦しいですが・・・」

ファムは胸の辺りを押さえて、息をしている。

「・・・よし」

リダラは急にファムに腕を伸ばし、お姫様抱っこのように抱きかかえた。

「なっ・・・降ろしてください。自分で歩けますから」

ファムはリダラの腕の中で暴れだす。

「無理するな。お前、進行しているんだろっ・・・？」

リダラが暗い顔をする。

「・・・はい」

ファムは暴れるのを止めて、俯く。

「お医者様にはもう先は短いと・・・」

苦々しい顔で前を見据える。

「・・・魔呪医には診てもらったのか？」

「いえ・・・」

「なら、診てもらえ。俺の信頼できる奴に頼んでやる。

リダラは少しの希望が見えたのか、ファムに向かって笑う。

「はい？」

ファムは首を傾げる。

「よし、行くぞ！」

リダラは踵を返して、歩き出した。

「ちよ、ちよっとお待ちください。今はあなたの衣装が先です。も

うあと何刻もないのですよ！」

ファムはリダラの服を掴んで、制止させる。

「それよりもお前の容態が先だ」

リダラが真剣な顔でファムを見る。それに負けじとファムが声を張り上げて、

「私よりも国のことが先です！ 私が死んでも国にはなんら影響はありませんが、国が死ねば何十万という民が死ぬことになるのですよ！」

怒鳴られた。

目を丸くして驚いていたリダラだがすぐさま反論しようとした。

「だが・・・」

「だがではありません！ 今すぐ、衣装室に向かってください！
いいですね？」

リダラは困った顔でファムを見る。

その顔は凜としていて意思を変えるつもりはないと目で語っていた。

「・・・分かった」

リダラは渋々ながら承知して、衣装室に向かって走る。

「もっと早く！」

ファムはリダラを叱咤する。

「はいはい」

リダラは半ば諦めて走る。

ファムは諦めたような顔をしているリダラの顔を見つめた後、リダラの胸に顔を埋める。

「どうした？」

リダラがファムを気にしながら聞く。

「いえ。ただ・・・こんな優しい方と結婚できると思うと嬉しくて・・・」

ファムは顔を埋めたまま、泣くように肩を震わせる。

それに気付いたリダラは走る足を止め、ファムを見る。

「お、おい？ まさか、泣いて・・・」

オロオロとリダラは聞いてくる。

リダラの腕の中から嗚咽が聞こえてきた。

「わ、わかったから泣くな。な？」

リダラが心の底から焦っている。

その様子にファムは泣きながらも心の中で笑っていた。

第二節 1話(後書き)

ファム(femme)はフランス語で妻という意味。

第二節 2話

「早く、行きましょう」

ファムが涙で濡れた顔を拭いながら、笑みをつくる。

「あ、ああ」

リダラが再び走り始める。

衣装室に着くまでの間、ファムはリダラをずっと見ていた。

その視線に気づいているのか、リダラの耳が徐々に赤くなっていく。それを見てファムはくすくすと笑う。

ファムの笑い声が聞こえると、リダラも自然微笑んだ。

そうしているうちに衣装室に着いた。

リダラはファムを下ろすと、衣装室の扉を開け中に入る。

中には、リダラの着るであろう服を持ったメイドが三人いた。

「さあ、みなさん。陛下に衣装を着せますよ」

ファムが手をパンパンと叩きながら作業の開始を告げる。

「え、まさか・・・」

「取り掛かって!」

ファムがやれというように指示をすると、メイドたちは目をキラッと光らせ、動き始めた。

「わ、や、止める! 自分でちゃんと着るから! もう逃げたりしない!」

リダラが悲痛な叫び声を上げ、服を脱がされないように死守しながら抵抗する。

「本当ですか?」

ファムが疑り深い目でリダラを見る。

「本当だ!」

「なら、いいでしょう。一度、私たちは退室します。私たちがいない間に着てくださいね」

「ああ、分かった」

リダラが冷や汗を流しながら、承諾する。

「では、私たちは出ましようか」

メイドたちは頷き、ファムとともに部屋を出ていく。

「はあ・・・なんとか、脱がされずに済んだ・・・。こづいことに関する女性の恐ろしさと言ったらないな」

リダラはぶつぶつ言いながら着替える。

自分で言った手前、逃げ出すことも出来なかった。

リダラが手を伸ばした式で着る衣装は以前、リダラが戦場で着ていた鎧に煌びやかな装飾が施され、白いマントが付いたものだった。

鎧にはヴァイスの国旗である、羽の生えた女性が十字架と剣を胸に抱え、その女性の後ろに柱のようなものがある。その国紋が胸の辺りに大きくついていて、白を基調としていた。

腰のあたりには式に使う剣が提げられている。

「はあ・・・」

リダラは着終えた後、もう一度溜息を吐いた。

「もう、よろしいですか？」

ファムがタイミングよく扉越しから聞いてきた。

「ああ」

「失礼いたします」

ファムとさっきのメイドたちが一緒に入ってきた。

「こんなもんでどうだ？」

リダラがファムに服を見せる。

「充分です。充分すぎるほどです」

ファムがリダラの格好を見て、頬を赤らめる。

「とてもお似合いになっていて、私びっくりしました。それにとってもかっこいいです。思わず見惚れてしまいました」

ファムは賛美の言葉を並べる。

それにリダラは照れて、顔を真っ赤にして少し俯く。

その姿を見てメイドたちは笑う。

それと同時に扉のところから笑い声が聞こえる。

「？」

気付いたリダラが笑っている人物を見る、

「ラフラ。お前、俺を見て笑っただろ」

リダラがラフラを睨みつける。

「そんなまさか。誰も陛下のことを笑ったりしませんよ」

そう言いながら、ラフラは笑いを堪えながら歩いてくる。

「ただ、夫婦って似るもののかなと。あと、馬子にも衣装だな・
・と」

「どういう意味だ？ それは似合っていないということか？」

「いえいえ、お似合いですよ。その白い衣装にファム様と同じ赤い顔っていうのは映えて、面白くて面白くて・・・」

ラフラは目に涙を溜め、笑いを堪える。

「ファ、ファム」

「はい」

「俺の顔は赤いか？」

「はい。真っ赤です」

その返答にリダラは一層顔を赤くして、走っていく。

「頭を冷やしてくる！」

そう言っつて、部屋を飛び出した。

「あはははは！」

ラフラは堪えきれなくなりとうとう笑い出した。

メイドたちは笑いながら、リダラを追うように部屋を出る。

「ふふふ・・・。それで、ラフラ。何故ここに？」

「ああ。陛下に頼まれたんです。ファム様を診てくれって」

ラフラは薄く笑ったまま、優しい顔でファムを見る。

「いつの間に・・・」

ファムが驚いたように目を見開く。

「先ほどですよ。ファム様が部屋の外でお待ちのときに陛下が私に魔呪を飛ばしたんです。それで、ここに来ました」

ラフラがそう言う。すると、ファムは納得したように顔を上げる。

「それじゃあ、ちやちやつと診ちやいましょうか」

ラフラがファムに椅子を出し、座るように促す。

「で、でも、あなたは攻撃魔呪が得意なのでしょう？ 回復魔呪とは違うのよ？」

ファムは座りながら困惑した表情で、ラフラを見る。

「私は魔呪という魔呪はマスターしているのですよ。それでなくても、陛下はともかく兵は皆、攻撃魔呪と回復魔呪はある程度使えるように訓練されているんです」

ラフラはファムの前に手で魔呪を展開していく。

「そう・・・なの」

ファムは目を閉じて、ラフラに委ねる。

「じゃあ、ちよつと調べますね。ピリピリするかもしれないですけど我慢してください」

ラフラは展開した魔呪に手を突っ込み、手に魔呪を纏わりつかせる。魔呪の付いた手で、ファムの体に触れる。

「・・・う」

ラフラが心臓の辺りを触ったとき、ファムが痛がった。

「心臓・・・ですか。うーん。ちよつと待ってくださいね」

ラフラはそういうと手に付いている魔呪を解除して、別の魔呪を手付け、ファムの胸の前に魔呪を展開する。そして、魔呪の付いた手で、ファムの前に展開されている魔呪に手を突っ込み、心臓に触れる。

ファムはビクツと動くが、ラフラは気にせず続ける。

「これは・・・呪いですかね」

ラフラは手を引っ込めて、すべての魔呪を解除すると、疲れた顔をするファムに診断結果を伝える。

「おそらく、ファム様の病は呪いです。自然的な病とは違います。

これは病状が非常に進んでいて、完全には呪いを取り払えないかもしれませんが、病状を改善させることはできます。呪いをしますか？」

ラフラは真剣な表情でファムを見る。

「いい・・・」

「当然だろう」

その時、ファムの言葉を遮ってリダラが賛同の言葉を発した。

「俺にはファムに長生きしてほしいからな。解呪を頼もう」

ラフラに解呪を頼むリダラの顔は真剣そのもので、王として夫としての威厳があつた。

「わかりました」

ラフラは頷く。

「ま、待つて！ 私は何にも言うてはいないわ！」

ファムがそれに異論を示す。

「ファム。俺はお前にそばに居て俺を支えてほしいんだ。分かつてくれ」

リダラはファムのところまで歩いてきて、ファムに目線を合わせ、真摯な瞳で見る。

「だって、それじゃあ今まで私がどんなに耐えて、覚悟してきたかわからなくなっちゃうじゃない！」

ファムが涙目でリダラを見る。

「すまない。だが、俺にはお前が必要なんだ。だから、そんな簡単に自分の命を捨てないでくれ」

リダラはファムをなだめる様に優しい声で言いながら、微笑んだ。

「う・・・馬鹿！ そんな顔で見られたら死ぬに死ねないじゃない・・・！」

ファムはリダラに抱きついて泣き始める。

リダラは優しくファムを抱きしめた。

「死ななくていい。生き続ければいい」

そう言つて、ファムの頭を優しく撫でる。

その様子をラフラは暖かく見守つていた。

その時、扉がたたまたましい音を立てて開かれる。

「陛下！ 閣下！」

その瞬間、リダラとラフラは鋭い表情になった。

「どうした」

リダラはファムを放しながら聞く。

ファムは困惑した表情で、リダラと入ってきた兵を交互に見る。

「それが・・・三大機卿の一つであるレーギア卿が反乱を起こしました！ 今、レーギア卿率いる軍が城を攻めようとしています！」

リダラは一度目を閉じ、ゆっくりと開くと声を張り上げ、

「場内にいる兵をすべて使って防衛線を張れ！ 国境にいる兵にはただちに城に向かうように伝令を飛ばせ！ 城下にいる兵には城下の民を城に避難させるように誘導させろ！」

リダラは命令を次々と下す。

ラフラは防衛線となる兵の総括をするため、部屋をすぐに出た。

ファムはそれをリダラの傍らで心配そうな顔で見守る。

リダラは命令を下し終わると、ファムに向き直り、

「ファム。俺も行ってくる。お前は式の準備をして待っていてくれ。

それから、来賓の方々も頼む」

リダラはそういって、部屋を出ようとする。

「怪我だけは！」

ファムがリダラに向かって声をかける。

それにリダラが振り返る。

「怪我だけはしないでくださいね！」

ファムが心配そうな顔でリダラを見ている。

それにリダラは頷き、心配はいらないというように明るい笑顔を向けて部屋を出た。

ファムはその背を見送り、近くにいたメイドに準備を進めるように伝える。

「殿方は戦場に立った。私たち女も女の戦場に立ちましょう！」

ファムはそう言って、メイドたちを励ます。

ただ、そのファムの心の中は不安でいっぱい。女の戦いどころではなかった。

だから、ファムは心の中で、
『どうか、ご無事で戻ってきてください』
と祈った。

第二節 3話

その頃、リダラは城の周囲に配置された防衛線に立っていた。

「ラフラ。兵の士気はどうだ」

リダラは兵たちを見ながら聞く。

「上々ですよ。陛下に付いてきている兵のほとんどは貴族というか三大機卿が嫌いですからね。ブチのめせると聞いたたらそりゃあ士気は上がりますよ」

ラフラは目を輝かせていつもとは違う辛辣な言葉を吐く。

それにリダラは苦笑いで答えた。

そして、前方を見る。

リダラの視線の先にはまだ遠くだが、リダラにははつきりレーギア卿の家印の入った旗が見える。

「そろそろだ。ラフラは国境から来ている奴に魔呪で戦闘の始まりを伝えてくれ。お前ら！ もうすぐレーギア卿率いる軍が来る！

それに備えて各々武器を持ち、戦闘配置につけ！」

リダラはそういうと自分も配置についた。

「陛下。まさか、出るおつもりで？」

ラフラが追ってきて聞いてくる。

「当然だ。ここは俺の国だ。俺の国を汚す奴と侵す奴は許さん。俺自らが粛清してやる」

リダラの目はこの先にある戦闘で輝いていた。

まるで、シュトリア軍を相手にしたときのような表情だった。

「そうですね。この国は陛下がいる限りは絶対に汚させません」

ラフラも目を輝かせて前方を見る。

「ああ。ラフラ、このこと援護は任せた。俺は部隊を率いて前線に出る」

リダラは剣を抜いて、ラフラを見る。

「わかりました。・・・第一から第三部隊まで陛下に従って前線に

出る！ 第四から第六部隊までは陛下たちを援護しろ！ 第七部隊は城内にいる来賓や民を護れ！ 第八部隊は私と一緒に城の回廊から魔呪で結界を張りつつ援護だ」

リダラは笑みを浮かべ、歩いていく。

ラフラはそれを指示する声で送る。

「お前ら！ 俺について来い！」

それに答えるように兵たちが声を上げる。

リダラはその声が収まると馬に乗って、部隊を率いて前線へと出発する。

ラフラたちはリダラが出発すると同時に、魔呪結界を展開する。

城を囲むように魔呪結界が展開され、城の周りに霞のようなものが立ち込める。

ラフラたちはその魔呪結界で城を護っている間に大規模攻撃魔呪を一斉に唱え始める。

魔呪結界の外側にラフラたちの唱えた魔呪が浮かび、その魔呪が敵に向かって飛んでいく。

その魔呪は敵の手前で粉碎し、土煙を上げる。

その土煙でレーギア卿率いる軍がたじろぎ、混乱するとその隙を狙ってリダラ軍が土煙を突き破って現れる。

敵は奇襲に混乱し、何もできずにいる。

リダラはそのうちに鎮圧してしまおうと考えた。

だが、その考えはすぐに改めなければならなくなった。

なぜなら、レーギア卿率いる軍の大半は魔呪によって動かされる人形だからだ。

人形をいくら倒しても意味が無い。

操っている魔呪使いを倒さなければ、人形は動き続ける。たとえ、大破しても破片となって襲ってくるだろう。

だが、その魔呪使いを倒すためには、レーギア卿本隊とぶつかることになる。

そんなことをしたら、こちらに大きな被害が出る。

リダラはその現状に舌打ちした。

今、リダラの前では部下の兵たちが人形と交戦している。

人形は死ぬことはないし、疲れることもない。攻撃が止むことはほばないだろう。

人形とは違って、こちらは生身の人間だ。

怪我をすれば動けなくなるし、簡単に死ぬ。

人形と交戦し続ければこちらの兵力を消耗してしまう。

自分についてきてくれる信頼のある兵たちを失うわけにはいかない。リダラはそう考え、兵に撤退させる。

「お前ら、退け！ 一度撤退だ。城に戻るぞ！」

リダラはそういうと、兵たちが後退するのを見届け自分も城に戻った。

城では魔呪を使って牽制をしている。

だが、その牽制を突き破ってこの城に辿り着くのも時間の問題だ。

「陛下！」

ラフラはリダラの姿を見つけると、近寄ってきた。

リダラは振り返り、ラフラを見る。

「敵は・・・人形だった。しかも、魔呪で粉碎しても塵にしても襲ってくる。呪者を潰さないとな。しかも一度でだ」

リダラは苦しい顔でいう。

「なっ・・・」

ラフラは驚きのあまり絶句した。

「それではこちらの兵を消耗するだけです」

「ああ。だから戻ってきた」

リダラは戻ってきた兵たちを見る。

「だが、遅すぎたみたいだ。もう、消耗している」

ラフラも同じように兵たちを見る。

血を流し、医師によって治療されている者。倒れている者。痛みに呻く者。

死人は出ていないものの、たったの数十分でたくさんの兵が怪我を

し、再起ができなくなった。

「クソッ！」

リダラは唇を血が出るほど、噛み締める。

ラフラはそれを見守る。

「陛下……」

リダラはふいに唇を噛み締めるのを止めた。

「陛下？」

リダラは何かを決断したように、前を見据える。

「ラフラ。お前は城の周りに結界を多重展開しろ。俺は……」

「まさか……陛下！ 駄目です。それでは、あなたの命が危ない！」

ラフラはリダラのその言葉に続くものが分かったのか、すぐに止めようとする。

「分かっているのですか？ あれは……死呪と呼ばれるほどの禁呪中の禁呪で、使った本人の命が危なくなるんですよ？ もし、陛下がお使いになれば成功すると思いますが、それではこの国を導く存在がいなくなってしまうです！」

ラフラは必死に制止しようと声を荒げる。

「分かってくれ、ラフラ。これは国の為なんだ」

リダラは説得するように静かな声で言う。

「分かっています！ それでも、あなたはこの国には必要な人だ。あなたがいなくなれば、あなたについてきた兵たちが報われません！

それに、ファム様はどうなさるおつもりですか？ 今日、今日やつと念願の結婚式なんです？ その日に、しかも、結婚する前にあなたが死んだらファム様はどれだけ悲しむとされているのですか！ あなたが死んだら、ファム様はあとを追おうとするかもしれない。あなたは、それでこの国を救う気ですか！ たった一人の女性を救えずして、国を救うことなんてできません。陛下。いや、リダラ。あなたは一国の主である前に、ファム様の婚約者で夫になる人なんですよ？ 私だったら妻を、愛する人を悲しませるよ

うなことはしたくはありません。それはあなたも同じでしょう？
だったら、その禁呪を使うのはお止めください・・・」

ラフラはまくしたてるように言い、そして最後は小さく咳くような声だった。

リダラは何も言えなかった。

今、目の前で目に涙を溜めてまで自分を制止しようとしている一番の部下がいる。

その姿にリダラは顔を背けた。

「俺は・・・ファムを悲しめたくはない。みんなを悲しめたくはない。だが、俺は・・・この国の王なんだ。だから、俺にはこの国を、民を護る義務がある。俺は、守るべきものを護れず無様に逃げ回るのはごめんだ。だから、俺はこの国を救うために・・・行く」
リダラは長く息を吐き出した。

背後ではラフラが言葉にならない悲痛な叫び声をあげる。

リダラは悲しみをぐっと堪えて、歩き出す。

ラフラはリダラの名前を呼び続ける。

だが、リダラは歩みを止めない。振り返らない。

リダラは堪え続ける。

この国を救うためだと思い込み続ける。

そうしなければ耐えられないから。涙が流れてしまうから。

『俺は、弱い。でも、あいつらは強いから。俺がいなくてもきつと・・・』

リダラは馬に乗る。

すると、兵たちも同じように馬に乗る。

だが、リダラは兵たちのほうを向かず、

「お前らは来るな」

と、できるだけ感情を押し殺した声で言う。

それに兵たちは動きを止める。

リダラはゆっくりと進み始める。

兵たちはしばらくリダラを見ていた。そして、これからリダラがど

うなるか理解できたのか、全員でリダラを制止する声をあげる。

「陛下！」

「リダラ様！」

「閣下！」

リダラの背に、悲痛な叫び声がいくつもかけられる。

それでもリダラは歩みを止めない。

歯を食い縛って、耐える。

涙が出るのを耐える。

背後では必死に制止しようとする声がたくさん上がる。

だが、リダラは振り向かない。

そして、リダラは結界を抜ける。

そこで初めてリダラが振り返った。

兵たちはリダラが戻ってきてくれると思っ、安堵する。しかし、

誰もが振り返ったリダラの表情を見て、涙を流し崩れ落ちた。

リダラは涙で濡れた顔でこちらに精一杯の笑みを向けていた。

その笑みが少し歪んだかと思うと、口だけで、

『ありがとう。あとは頼んだ』

と、今までついでに来てくれた兵たちに向かって言った。

兵たちはリダラの名前を叫ぶ。

リダラはそんな中、馬を走らせる。

背後ではまだ声がする。

リダラは涙を拭い、目の前に広がる人形の軍隊を見据える。

「ラフラ・・・ファムを、頼んだぞ」

リダラはそういうと、馬を降り、城を見る。

ラフラはちゃんとリダラの言った通り、結界を多重展開したようだ。

「・・・それでいい」

リダラは城に微笑むと、眼前に広がる人形の大群に突っ込んだ。

兵たちはリダラの姿が見えなくなったあと名前を呼び続ける。

ある者はリダラを追おうとした。しかし、多重展開された結界に阻まれて追うことができない。

またある者は自分の剣でリダラのアートを追おうとする。そして、それは別の兵に止められている。

ラフラはそれを見て、手を握り締める。

「何故・・・ここまで慕われているに・・・何故自分一人で抱え込もうとするのですか・・・？」

ラフラは爪が手に食い込み、血を流すほどに握りしめながら静かに涙を流した。

その時、城の外で眩いばかりの白い光が現れ、世界を包んだ。

その影響で多重展開した結界の大半が砕け散ったが、残った結界で城を護った。

ラフラはその光を見た瞬間叫んだ。

「リダラ！」

そして、膝から崩れ落ちる。

「なんで・・・なんで・・・」

ラフラは地面をダンダンと叩く。

次第にそれは地響きのように周りに響く。

その波に乗って、兵たちが涙を流す。

ラフラは兵たちの嗚咽を聞きながら、後悔する。

「なんで・・・私は、止めなかつたんだ。無理やりにも止めていれば・・・」

ラフラは地面を叩いていられなくなって、涙を流してうずくまる。

そのラフラを優しく、撫でる人物がいる。

ラフラが見上げると、そこにはファムがいた。

ファムは悲しそうな顔で、ラフラに微笑んでいる。

「ファム様・・・」

ラフラはファムの姿を見て、涙をまた流しそうになる。

だが、それを堪えて涙を拭う。

「ファム様。手の治療を・・・」

ラフラはファムの手を取ろうとした。

だが、ファムは手を引っ込める。

ファムの手は血で染まっていた。

おそらく、壁を血が出るまで叩いたのだろう。

ファムの頬には涙が流れたあとがある。

涙を流しながら壁を叩き続けたのだろう。

でも、ファムはこんな状況でも笑みを無くさず、ラフラに接する。

本当ならラフラよりファムのほうが泣きたいはずなのに我慢している。

肩を震わせて、悲しみに耐えている。

だから、ラフラは、

「ファム様・・・泣いてもいいですよ・・・？」

と、優しい声で言う。

それにファムは首を振る。

「私は、まだ、泣けない。あの人が開いてくれた道を進まなければいけないのだから」

ファムは気丈に振る舞う。

ラフラはそれに見習うように、立ち上がり、次の命令を出す。

「第一から第三部隊は待機。第四から第六部隊は敵を確認次第殲滅しろ。第七、第八部隊はここで城を護れ」

ラフラは精一杯声を張り上げる。

だが、誰も動かない。

誰もが悲しみのあまり動けない。

「・・・陛下がいなくなったのは悲しい。だが、陛下が身を呈してまで護ったこの国を護りつづけなければ、陛下が悲しむことになる。だから、どうか、動いてくれ・・・」

ラフラは悲しみを思い出したのか、声が小さくなる。

兵の一人が

立ち上がり、馬に乗る。

それに続いて兵たちが馬に乗って、出発していく。

ラフラは悲しい顔で見る。

「ラフラさん。俺たちは陛下が死んでないと信じますよ。だから、これが終わったら陛下を探させてください」

「ああ」

ラフラはそれに力強くうなずいた。

兵たちは頷き、馬を走らせる。

ラフラはそれを見送り、顔を曇らせる。

ラフラも心の中ではリダラが生きていると信じている。

だが、頭の中ではリダラは死んでしまったと思っっている。

ラフラはそのどちらも可能性があるだけにどうしたらいいのか迷い、顔を曇らせる。

兵たちは次々と城を出ていく。

本来ならば、ラフラも一緒に行かなければならない。

だが、ラフラ動かず、空を見上げている。

空は、嵐が来そうな黒い雲に覆われていた。

第二節 3話（後書き）

魔呪のランク

魔呪<禁呪<死呪<神呪

第三節 1話

リダラが死呪を使い、国を救ってから三ヶ月が経った。城ではいつものようにメイドたちが走り回っている。

兵たちはリダラがいなくなっただけから訓練に集中できないのか、ぼんやりと空を眺めたままにいる。

兵たちはあの後、敵を殲滅した。と言っても、ほとんどは死呪によって塵も残さず死んだ。その中にはレーギア卿もいる。

そのあと、すぐにリダラの搜索を開始したのだが、リダラに関わるモノは街のどこにもなく、そこにはクレーターのようにな大きな穴があっただけだった。

まるで、そこにリダラが存在していなかったかのようだったらしい。それからひと月の間、兵たちは搜索を続けたがリダラは見つからず、やむを得ず搜索を止めたのだ。

あれから、城から笑顔が消えた。

城にはいまだに悲しみが溢れており、笑える雰囲気ではなかった。

城にいる者全員がリダラを喪った悲しみを忘れられずにいた。

それは自分にも当てはまる。

私はリダラの不在により、一時的な王としてこの国を導いた。

だが、誰もがリダラを望んでいるのに違う人物が王になっても意味がない。それに私もリダラ以外の王など認めたくもなかった。

今や、この国は神聖帝国の活気を失い、廃国に成り果てようとしていた。

「ファム様。失礼します」

ラフラはドアをノックすると、部屋に入った。

「ファム様、術呪をさせてください」

ラフラは部屋に入るといきなりそんなことを言う。

「・・・」

ファムは答えない。

ずっと窓の外を見つめて動かない。

「ファム様。陛下はファム様に治ってほしいときっとお望みですよ？」

「・・・ひとは」

ファムが呟く。

「・・・あの人はもう、どこにもいないわ」

ファムは外を見ながら、静かに涙を流した。

その言葉にラフラは俯いて何も言えなくなった。

その時、外からたくさんさんの馬の蹄の音が聞こえてきた。

「？」

ラフラは窓からそれを見る。

そこには綺麗な隊列を保ち、城に向かって歩いている馬の軍団があった。

そして、その隊列の中央には旗を掲げている者がいる。

その旗にラフラは見覚えがあった。

「何故、ここにシュトリアが？」

それはリダラが王となる以前に倒し、ヴァイスの傘下に下ったシュトリア連合国だ。

そのシュトリアの旗印を付けた馬たちが城に向かってきている。

ファムもそれを見つめる。

「ファム様」

「ええ」

ファムはラフラの意図を察したのか承諾した。

ラフラは部屋を出る前に振り返り向き、

「ファム様・・・陛下は、リダラは生きていますと信じています。だって、あの人は体が丈夫で戦うことしか能がないような人ですから。そうは簡単に死にませんよ。それにリダラが帰ってきたとき、ファム様が元気なお姿でなかったらリダラは悲しみますよ？　そして、そんな姿のままにした私を怒鳴るでしょうし。だから、笑ってください」

ラフラは小さく笑いながら、部屋を出た。

部屋を出ると同時に、ラフラは足音もなくシュトリア軍のいる場所に向かって走る。

走りながら苦笑をする。

「生きていると信じています、か。そんなのただの気休めだ」

ラフラは唇を噛み締めながら走る。

前方が開け、ラフラが前を見るとシュトリア軍の現国王スウアルツ・ネルヴィが馬に乗ってこちらを見下ろしていた。

「シュトリア連合国の国王陛下、わざわざこのようなところへおいでくださいました」

ラフラは丁寧な腰を折る。

「貴様はあの男の部下か？」

スウアルツが気にせず、聞いてくる。

「いかにもその通りでございます。今日はどのような用向きでこの国にいらしたのでしょうか？」

ラフラは冷静に受け答える。

先程まで唇を噛み締めていたとは思わせないように。

「届け物だ」

スウアルツは馬から降りないまま、低い声で答える。

「届け物？」

「ああ」

スウアルツは背後に控えている馬車をちらと見て、こちらに来るように命ずる。

馬車がそれに従い、ラフラの目の前に来て止まる。

「これが届け物だ」

兵がスウアルツの言葉と同時に馬車の中にあつた布を取る。

「！」

取られた布に隠れていたものにラフラは驚き、そして顔を歪めた。

「……陛下」

ラフラの顔は涙に濡れて、歪んでいる。

馬車の中にはリダラが体中に包帯を巻いて、傷だらけの姿で横たわっている。

「届けたからな」

スウアルツは馬を反転させ、馬車を置いて去ろうとする。

ラフラは急いで涙を拭くと、スウアルツを制止する。

「お待ちください」

制止され、スウアルツは止まり、振り返る。

「陛下をわざわざシュトリア国王であるスウアルツ・ネルヴィ様がいらっしゃったのには意味がお在りなのでしょう？ 少しの間だけで構いません。どうか、この城に滞在し、その意図をお教えてください」

ラフラはスウアルツの前に立つと、真剣な瞳を向ける。

スウアルツはその瞳を真っ直ぐ見つめ、溜息を吐くと馬を降りた。

「お前の上司が回復するまでだからな」

ラフラはそれに正直に喜び、顔を微笑ませる。

「ありがとうございます。どうぞ、城の中へ。ご案内いたします」

ラフラはそういうと、スウアルツを城内へと案内する。

近くにいた兵士にリダラを集中治療室に連れて行くように命じて。

「おい！ 聞いたか？ 陛下が、リダラ様が帰ってきたって！」

リダラの帰還に歓喜の声を上げる兵がいる。

「本当かよ！ 良かった・・・これで、この国も安泰だ」

リダラの帰還にホッと胸を撫で下ろす兵もいる。

その歓喜の渦の横をラフラとスウアルツは通り過ぎる。

「あいつはここまで慕われているのか？」

スウアルツは周りを見渡しながら聞く。

「はい。陛下はこの国の兵のほとんどを救った人物ですから。それにこの国の希望であり、同志であり、家族なんです」

ラフラは微笑みながら先を進む。

「兵を救った？」

スウアルツが片眉を吊り上げて聞いてくる。

「はい。ネルヴィ様もご存じの通り、前王は悪政を敷き、たくさん人間を殺しました。前王の時代はまだ奴隷制もありましたし、人体実験もありました。ここにいる兵のほとんどはそんな者たちなのです。戦闘奴隷だったり、人体実験の実験体にされたりした者たちです。皆、いずれ死ぬだろうと思っていたものばかりで、そんな者たちを救い、自分の部下にしたのが陛下なのです。前王であっても陛下の部下を勝手に使うことも殺すこともできませんから。恐ろしくて。まあ、そんな陛下ですから、部下の兵たちには無理はさせず、自分一人で何事もすべて片付けようとするお方です。前王ならするはずのないこともしますしね」

ラフラは自慢するように語る。

「例えば？」

「そうですね……。本来なら王は前線に出向かないでしょう？ですが、陛下は直々にというか一番に出向き、沈静化させるんです。それも出来るだけ人が死なないように、血が流れないように。一度だけ、兵が到着する前にすべてが終わってたこともあります」

ラフラは思い出し、小さく笑う。

その時、明るい笑い声が聞こえた。

ラフラは一度止まり、明るい笑い声のした方を見る。

そこには城の庭で兵と遊んでいる子供たちがいた。

「それから、このように城を開け放って、民の誰もが入れられるようにしました。今やこの城はあの子達にとっては公園みたいなものです」
スウアルツも同じように子供たちを見る。

「だが、それでは警備もままならず、子供が抗争に巻き込まれたりしないか？」

「大丈夫です。戦術を持たない民には自衛具として、この首飾りや耳飾りを支給しています」

ラフラは懐からそれほど派手な装飾のない質素な首飾りを出し、スウアルツに見せる。

「これが一体なんだというのだ？」

「この首飾りには魔呪結界が施されています。これには最先端の技術を費やしました。この首飾りは自動的に魔呪を発動させ、物理攻撃、魔呪攻撃の両方を防げる代物なんですよ。それに、城の敷地内にいる限り攻撃はあまりくありません」

ラフラはその首飾りをまだ自衛具を持っていない子供に上げ、頭を撫でるとまた歩き出した。

「・・・どうということだ？」

「この城には自然の魔呪結界が施されているんです。あなたもご存じでしょう？ 四つの大陸に打ち付けられた杭の話を」

ラフラはスウアルツが滞在する客間に辿り着くと、扉を開け中に入るように促す。

スウアルツはそれに従い、中に入る。

その部屋は客間というには装飾がほぼなく質素なただの広い部屋だった。

「それで？」

スウアルツはその先を促す。

ラフラは微笑み、椅子に腰掛けるように促す。

スウアルツが椅子に座り、話が再び始まった。

「この国に杭があるのはご存知ですよね？」

「ああ。確か、白の杭だったな？」

スウアルツは自信がないのか聞き返してきた。

「はい。そして、その杭があるのがこの城の地下です。その杭の影響でこの城への魔呪の攻撃は全て無効化されるんです。まあ、攻撃力の強すぎる魔呪は防ぎきれなかったりしますが。それもそうはありませんし。ですから、この国では一番の安全地帯です」

ラフラはメイドにお茶を持ってくるように言う。

「そして、このハイラハドム大陸で一番の危険地帯でもあります」

「どうということだ？」

「もし、杭が抜ければ最初にこの城が崩れ落ち、狭間に消える。そ

して、次に国、最後に大陸です。だから、ここは一番安全で一番危険なんです」

ラフラはメイドが持ってきたお茶を一口すすする。

「もしや、あいつが民に支給しているアレは杭が抜けた時の保険か？」

「そうです。大陸が滅んでも民だけは生き残れるようになっていきます」

ラフラは外を眺める。

スウアルツは納得したのか、一口お茶をすすった。

「少し、話が長すぎましたね。では、今度はあなたに話していただきますしょう。何故、ここに来たのですか？」

ラフラが真剣な視線を向けながら微笑みかける。

「あいつを届けに来ただけだ。理由はない」

スウアルツはまたお茶をすすする。

「嘘でしょう？」

ラフラは信じていないのか疑り深い視線を向ける。

「嘘ではない。事実だ。あいつが急にシュトリアの城に降ってきたんだ。邪魔だから届けた。それだけだ」

「・・・降ってきた？」

ラフラが眉を寄せる。

「ああ。急に強い光が現れたと思ったら、あいつが空から降ってきたんだ」

ラフラはそれを聞いて、考えるように目を閉じる。

「・・・なるほど」

ラフラは納得したのか、お茶をすすった。

「？」

「いえ。急に突拍子もなく降ってきたというので、何かと思ったんですが、そういうことですか」

「どういうことだ」

「陛下は禁呪中の禁呪、死呪を使用したんです。おそらく、死呪の

光に吹き飛ばされたんでしよう。シュトリアは遠いですから、たたひと月搜したただけでは見つけることなどできないわけです」

ラフラはその結果に笑った。

「何処が可笑しい？」

「いえ、陛下は最後まで運がいいなと思ひまして」

ラフラは笑いを堪えている。それに、スウアルツは眉間に皺を寄せ、深く息を吐いてから、低い声をより一層低くして、

「そんな流暢なことば言っていられないかもしれないぞ」と重みを伴った言葉を言った。

第三節 2話

低く重苦しく言った。

「ど、どういことですか？」

動揺した声音でラフラは聞く。

「あいつは・・・もう長くないかもしれない」

ラフラの心にスウアルツの言葉が低く響く。

「え・・・う、嘘でしょう？」

ラフラの体が震え始めた。

「本当だ。おそらく、その死呪とかいうやつの影響だ」

諭すように事実を淡々と語る。

「そんな・・・」

「噂によれば、死呪を使ったものは生き残ったとしてもその生気を杭に吸われると聞いたことがある。あいつがシュトリアに降つてきた時、あいつはもう死にかけた。なんとかうちの魔呪医に生気を魔呪で形成して、命を繋ぎとめているがそれもいつまで保つかかわらん」

スウアルツは苦々しい表情でカップの中のお茶の水面を見る。

「もし、あいつが生きたいと願うなら一つだけ方法がある」

スウアルツは相変わらず苦々しい顔のまま腕を組み、ラフラを見る。

「それは？」

ラフラは真剣な顔で聞き返す。

「シュトリアに伝わる神呪だ」

「神呪？」

「ああ。この国にも当然あるだろう？ 神より授かりし呪いだ」

「ええ。ありますけど、ヴァイスは攻撃系なんです。シュトリアは回復系なんですか？」

ラフラはきよとした顔をする。

「いや、シュトリアも攻撃系だ」

「なら、どうやって陛下を救うんですか」

ラフラはイライラしたような表情でスウアルツをみる。

「神呪を逆呪文で使う」

スウアルツは真面目な顔でそれを言う。

「それは一歩間違えれば死呪になってしまつのではないですか？」

「大丈夫だ。今まで何度もそうして使つてきたからな」

スウアルツはそういうと椅子に踏ん反り返る。

「ですが・・・」

ラフラは迷っている。一歩間違えればリダラは死に、術者も死ぬ。

そのような神呪を使ってよいものか。

「まずはその方法を聞いてから悩んでくれ」

悩んでいるラフラを見て、スウアルツは溜息を吐く。

ラフラはそれに頷く。

「本来の神呪は敵の生気を奪い取り、その生気で敵を絶命させるというものだ。逆呪文で唱えると、対象の生気を全て奪い取り、奪い取り増幅させた生気を注ぎ込み、生き返らせるというものだ。これをやるなら早くがいい。時間が経つにつれて生気も失われていく。

そうなれば成功する確率は大きく下がる」

スウアルツは立ち上がり、外を見ながら方法を説明していく。

説明が終わる頃には、ラフラは苦悩の表情で机を見ていた。

「もし・・・これ以上決断が遅くなったら・・・」

「あいつは助からない」

外を見ながら重く言う。

外は橙色に染まりつつあった。

「なら、日没までに決断します。なので、時間をください」

ラフラはそういうと立ち上がり、悩んだ顔のままスウアルツを見る。

「好きにしる」

スウアルツは短く言うと、目を閉じる。

背後ではラフラが小さくありがとございます、と言い、早足で

部屋を去り、扉がバタンツと閉められる音がした。

ラフラはリダラの寝ている集中治療室に向かっていた。

『どうすればいい？ スワアルツ様に頼んで神呪を施してもらおうか？ だが、それでは陛下の身に危険が及ぶかもしれない。だが、今のままでいても陛下は死んでしまう。どうすれば……』

ラフラが思索しながら廊下を早足で歩いているとファムが歩いてくる。

思索をするのを止め、ファムに聞いてみようと思った。

「ファム様」

焦りで震える声に構わず、ファムを呼び止める。

「ラフラ、どうしました？」

ファムはラフラの表情を見て、心配そうにしながら聞いてくる。

それに、ラフラは聞けなくなった。だから、

「陛下にはもうお会いになりましたか？」

と、別のことを聞いた。

「……ええ。今まで付き添っていたわ。ずっと泣いていたから、顔を洗おうと出てきたの」

ファムが苦笑する。

「それで、一体どうしたの？ 何かあったの？」

心配そうにラフラの顔を覗き込みながら、ファムが聞いてくる。

ラフラは意を決して、歩きながらリダラの現状、リダラを救うための案を話した。

「なるほど、それであなたはどうすればいいか悩んでいたのね」

「はい……」

ラフラは少し落ち込み気味に頷く。

「私も分からないわ。どうすればいいかなんて。でも、私はあの人生きてほしいわ。私ができるのはそれだけ」

ファムはそういう。

ラフラはまた苦悩し始めた。

「じゃあ、どうすれば・・・」

「本人に聞いてみましょう」

ファムはそう言って目の前の扉を開ける。

中にはリダラが魔呪に囲まれて眠っている。

いつのまにかリダラが寝ている部屋へと到着していたようだ。

「聞くつて、どのように？」

ラフラは困惑気味に問いかける。

ファムは眠るリダラを柔らかい表情で見る。

「あなたは知っているかしら。私はこの人によって封印された力があることを」

「封印された力？」

ラフラは同じようにリダラを見る。

「ええ。この人は私が傷つかないように力に封印をしたわ。心を読む力をね」

ファムはそういっておもむろに懐から小さな石を取り出す。

「これが、私の力の結晶よ。この人はこの形に封印したの」

そして、それを自分の胸に押し当てる。

すると、その石は強い光を放ってファムの体に溶けていった。

「ふう・・・久しぶりだね。なんだか、自分が帰ってきたみたい」

ファムは自分の胸に手を当て、小さくおかえりと言った。

「それじゃあ、陛下に聞いてみましょうか。ラフラ。あなたは陛下に私に話したことを話して。私はその時々陛下の声を聴いて話すわ」

ファムはそう言ってリダラの手を握り、目を閉じる。

それを見て、ファムに話したことを全てリダラに話した。

「・・・そういうことなのですが、どうすればいいでしょうか」

すると、返答するようにファムが口を開け、言葉を発した。

『・・・お前は どうしたい？ ラフラ』

ラフラは一瞬驚いて、すぐに答える。

「当然、私はあなたに生きて欲しいですよ。でも、その方法だとあなたが死んでしまいかもしれない。二度と戻ってこないかもしれない。もう・・・そんな思いはしたくありません」

ラフラは悲しそうな顔をしている。

『そうか・・・だが、お前の言っていることは矛盾しているぞ。簡単に言えば、スウアルツは俺を殺して、逆呪文の神呪で甦らせるってことだ。そうしたら、俺はもう死人だ。お前は俺に生きてほしいと言う。だが、このままでいれば俺は確実に死ぬ。お前ならどっちを選ぶ。何もせずに死ぬのを待つか、神呪を施し、死人になろうとも生きながらえさせるか。お前の好きな方を選び。あ、ちゃんとファムと相談してからだぞ』

リダラはそう言うのと静かになった。

ファムはリダラの手を握ったまま眠ってしまった。

どうやら、力を使うとすごく疲れるみたいだ。

ラフラは一人、考える。

リダラを見殺しにするか、死人でも生きながらえさせるか。

その答えはラフラの中ですぐに決まった。

あとはファムと相談して最終決定するだけだ。

だが、ファムはリダラに寄り添うように眠っている。

ラフラは一度部屋を出て、頭の中を整理してからファムと相談しようと思った。

部屋を出て、廊下を歩いていると兵たちが子供たちと楽しそうに一緒に遊んでいた。

空が赤く染まってきたのに飽きもせず、子供たちは兵たちと遊んでいる。

それを見て微笑んだ。

同じように子供たちが笑っていたある日を思い出したのだ。

第三節 2話（後書き）

次回は過去の話を行います。

第三節 2・5話 ラフレの思い出(前書き)

前回のあとがきで書いた通り過去を書きました。
これは飛ばしても大丈夫です。

第三節 2・5話 ラフレラの思い出

「うん。やっぱり子供は元気に遊びまわって、笑っているのがいい。その方がこちらでも元気になる」

陛下は城の庭で遊ぶ子供たちを見て嬉しそうに言った。

それに私は頷いた。

「そうですね。前は城の中はいつもピリピリしていましたが、城を開放してから子供たちが遊ぶようになってからずいぶんと空気が和んでいるように感じます」

「だな。兵たちの緊張も解れるし、気分転換にもなる」

「でも、兵たちが気分転換のしすぎでよくサボるようになってしまいましたけどね」

私は少し皮肉を混じらせて言った。

それに困ったように陛下は頬をかいた。

「ま、まあ。それはこれからの指導次第でどうにでもなるだろう」

そう言って、陛下は逃げるように子供たちのところへ行った。

「あゝ、王様だ〜！」

「仕事サボっちゃいけないんだ〜！」

子供たちに指をさされ、少し苦笑いした陛下は構わず子供たちを集まるように言う。

まるで、内緒話をするようにひそひそと話している。

それに子供たちは面白そうにうなずいた。

「わかった。王様の為だもん！」

「よ〜し。いい子だ」

陛下は子供たちの頭を一人一人撫でる。

子供たちは嬉しそうにキヤツキヤツと笑っている。

「王様〜！ お城の探検がしたい！」

「したいしたい〜！」

子供たちが城内の探検をしたいと言い出した。

城を開放しているといっても、国の内政に関わる場所や仕事場は厳重に警備員が入ることはできない。それ以外の城内はすでに子供たちは網羅している。

だから、一般開放されていない場内を探検したいということなのだろう。

「探検か。いつもの場所じゃ駄目なのか？」

「だめ」

「だめなの」

子供たちが一斉に拒否をした。

それに陛下は困ったように眉を八の字にした。

それに私は思わず、笑ってしまった。

「ああ、ラフラ兄ちゃん笑ってる〜！」

「王様のこと笑ってる〜」

「・・・ラフラ？」

陛下が凄味の効いた笑顔を私に向けた。

「いえ。陛下を笑ったわけでは・・・あ、仕事やらなきゃ・・・」

私は逃げるように踵を返す。

すると、背後で、

「ゴー！」

という陛下の声が聞こえた。

そうしたら、子供たちの

「ラジャー！」

という声と同時に、私は前のめりに倒れた。

「いつつ・・・」

私が顔を押しさえながら起き上がると、私の周りに子供たちが囲むようにいた。

「隊長！ 捕まえました！」

子供たちが敬礼を陛下に向けてやる。

「うむ。よくやった。褒美をやる」

そう言って、陛下はどこから菓子を取り出して、子供たちに配る。

それに嬉しそうにはしゃぐ子供たち。

子供たちの横をすり抜けて、陛下が私に近づいてくる。

「ラフラ。今日は城内の仕事はすべてなし、だ。今日は特別に一般開放されていないところも開放して、子供たちと遊ぶ」

陛下が子供のように笑った。

「ですが・・・！」

「反論は聞かんど。もう決めたことだ」

私は、溜息を吐くと立ち上がった。

「わかりました。城内の者たちに伝えてきます。探検でしたよね？」

「ああ」

「一塊で行動するという条件付きですからね」

「ありがとう、ラフラ」

陛下が嬉しそうに笑った。

私はそれを見た後、微笑んで城内の者たちに伝えに行った。

そして、戻ってきた時には先ほどの倍以上の子供が陛下と一緒にいた。

「な・・・」

予想外の多さだった。

どうやら、城内探検ができるという噂をどこかで嗅ぎつけたらしい。

子供の情報網は恐ろしいと感じた。

驚いていると、陛下がこちらを見た。

「よし。ラフラが戻ってきたから探検に行くぞ〜！」

陛下がオーというふうに手を挙げる。

それを真似するように子供たちもオーと言いながら手を挙げる。

それを機に陛下主導の子供探検隊は出発した。

陛下は列の一番前を歩き、私は列の一番後ろを歩いた。

陛下と私の他にも兵たちも一緒だ。

こればかりは譲れなかった。

子供たちが単独行動しないように兵たちに見てもらおうのだ。

さすがに自分一人では無理だ。

子供たちは陛下と手をつないで、嬉しそうに歩いている。

「はあ……」

私は思わず、溜息を吐いた。

それを誰かに見られているとは気付かなかった。

「……」

そのまま探検隊は進み、まず陛下の執務室に到着した。

「ここが俺の仕事場だぞ」

陛下が扉を全開に開けて中に子供たちを招き入れる。

子供たちは水のように中に入っていく。

そして、あちこちを物色を始めた。

そんなことをしていても陛下や私たちは焦りもしない。それどころか余裕だ。

「さすが、ラフラ。書類の類はどこにやったんだ？」

「嚴重に金庫に仕舞いました。あそこなら、子供たちどころか泥棒も入ることはできませんから」

私は当然、と笑う。

「そうだな。お前は本当に頼りになる」

陛下が嬉しそうに笑いかけてきた。

「それもそうでしょう。陛下がそんな人なんですから」

「はは。そうだな」

陛下が軽快に笑う。

すると、子供たちが飽きたように陛下に集まってきた。

「あきた〜」

「別のところ」

子供たちがねだるように陛下に言っている。

「よし、じゃあ、次のところに行くぞ！」

「その前に出席確認です」

部屋を出ようとする陛下の襟をつかんで戻す。

それに陛下がぐえと小さく言った。

「はい、じゃあ番号！」

そういうと、子供たちは整列して、一人ひとり番号を言っていく。

「三十六人全員いますね。じゃあ、出発」

ラフラが全員いるのを確認すると、扉を開ける。

陛下がまた主導して城内を探検する。

その途中でファム様も加わった。

子供探検隊は元気よく歌を歌いながら進む。

その時、遠くから舌打ちが聞こえた。

その聞こえた方向を見ると、右の角に三大機卿の三人がいた。

舌打ちをしたのはレーギア卿のようだ。

他の二人は微笑ましいものでも見るように笑っていた。

私は思わず、レーギア卿を睨んでしまった。

すると、レーギア卿はそそくさといなくなった。

それに私が鋭い視線のまま笑うと、女の子が私の服の裾を引っ張った。

「どうしました？」

私はすぐに顔を柔らかくして、その女の子の目線に合わせるようにしゃがむ。

「ラフラお兄ちゃん、つかれちゃった？」

心配そうに女の子が私の顔を見ている。

「・・・」

こんな子供に心配されるとは思っている、

「さつきもため息してたし。お母さんがため息するときはずかしくて、女の子が少し、俯く。」

「・・・大丈夫」

優しく笑いながら、女の子の頭を撫でる。

すると、安心したように私に抱き着いてきた。

「よかった。だって、お父さんがため息をしたあとになくなったやつやったから、ラフラお兄ちゃんもいなくなっちゃったのかと思った」
女の子は私にぎゅっと抱き着く。

それに私は、女の子を抱き上げ、明るい声で、

「私はいなくならないよ」

と言った。

すると、女の子は満面の笑みを浮かべた。

女の子を抱き上げたまま、前を見てみると、子供探検隊の全員が見ていた。

「・・・」

その中心で陛下が優しく笑っていた。

そして、一人の子供が沈黙を破って、

「ラフラ兄ちゃん、アンナを泣かした〜！ いけないんだ！」

と言ってきた。

そのアンナという女の子を見ると、確かに泣いていた。

それに困惑して、私は動けなかった。

「いーけないんだーいけないんだー」

と、子供たちに指を差された。その中に陛下の姿があった。

それになんとなくいらだったので、陛下にだけチョップを食らわした。

しばらくしてから、探検隊はまた進み始めた。

私の左手にはアンナの手が繋がれていた。

第三節 2・5話 ラフレラの思い出(後書き)

次回からは本編に戻ります。

第三節 3話（前書き）

本編に戻りました。

第三節 3話

その時、子供の笑い声が一際大きく聞こえた。

兵たちのなかに子供嫌いはいらない。どちらかといえば、リダラやラフラを含め子供好きが多い。

子供好きな兵たちのほとんどは戦場に立ったことが幾度もある者たちだ。子供嫌いの者のほとんどは戦場に立っていない兵だ。

それでも、この城内には子供の笑い声がこだまする。

子供の笑い声は平和だと思わせてくれる。

「やはり・・・この国には陛下が必要だな・・・」

ラフラはそう呟くと、踵を返してリダラとファムのいる部屋へと向かった。

ラフラが部屋に入るとファムは起きていて、リダラの手を強く握っていた。

「ファム様」

ラフラは小さな声で呼びかける。

ファムはゆっくりと振り向き、こちらを見る。

「答えは出たかしら？」

ファムはリダラの手を放して、立ち上がる。

「はい。それでファム様にも意見を聞きたいのですが・・・」

「私は決まっているわ」

ファムは決心した表情でラフラを見る。

「それでは、どうしますか？」

ラフラはリダラを見ながら聞く。

「陛下を、甦らせる」

ファムも同じようにリダラを見る。

「当然ですよ」

ラフラは微笑みながら答える。

そして、

「では、スウアルツ様に言ってきます」「
ラフラは部屋を出て行った。
それを見送り、ファムはリダラの手を握り自分の額に当て、小さく、
「・・・これでいいわよね・・・？」
と言った。

答えは出た。

あとは早く呪を施さなければならぬ。
時間がない。急がなければ。

ラフラはそう思うと自然、足が速くなり、いつの間にか走っていた。
急がなければ。

リダラを助けるために。

この国をリダラに導いてもらうために。

急がなければ。

ラフラが焦燥に駆られていると、スウアルツの部屋に着いた。

勢いよく扉を開けると、ラフラが来ることが分かっていたようにス
ウアルツが待ち構えていた。

「スウアルツ様・・・決め、ました・・・！」

「それで、どつちに？」

「・・・陛下を助けてください」

ラフラは息を整えながら真剣なまなざしでスウアルツを見る。

「・・・分かった」

スウアルツは静かに息を吐くと、窓を開け、魔呪をどこかへ飛ばし
た。

「何を？」

息を整え終わると、スウアルツに聞いた。

「シユトリアにいる神呪を目覚めさせた」

スウアルツは不敵に笑っている。

「目覚めさせた？」

「ああ。そろそろ来るぞ」

その時、開け放たれている窓から突風が吹いた。
ラフラは驚き、目を閉じ手で顔を覆うように防いだ。
風が止み、目を開きながら手を下ろすと、スウアルツの隣にヒトが立っていた。

それは人と呼ぶには美しすぎ、化け物と呼ぶには人に近すぎる。
だが、それは人とは違う気配や雰囲気を纏っており、何か神聖なもののように感じた。

「これがシュトリアの神呪の具現化した姿だ」

スウアルツの隣に立つヒトは男か女かわからない風貌をしていた。

「神呪つて、具現化するのか・・・？」

ラフラは呆然と眩き、絶句した。

【ああ。これが我の姿だ。驚いたか人間】

ラフラは目を見開き、驚いて口をパクパクさせる。

「しゃ・・・喋った・・・」

ラフラは言葉を失った。

「よし、シュトリア。お前を逆呪文で使いたいんだが、いいか？」

スウアルツはそのヒト・・・シュトリアに普通に話しかけている。

【またか。今度は誰だ】

シュトリアも普通に答える。

「この国の王だ」

【この国？ ヴァイスのことか？】

「ああ」

スウアルツは頷き、ラフラを見る。

「こいつの上司でな。死呪を使ったせいで瀕死なんだ」

【死呪だと？】

「ああ。どうかしたか？」

【いや・・・】

シュトリアは何かを考えるようにしたあと、その考えを打ち払うように頭を振った。

「それで、そいつを救ってほしいんだが・・・」

スウアルツが少し、頼みこむような声色で言う。

【本当はヴァイスの人間を救いたくはないが、現国王の頼みとあれば仕方がない】

シュトリアはそう言ってラフラに近づく。

「すまん」

スウアルツはそれを見ていた。

シュトリアは一瞬チラリとスウアルツを見ると、ラフラの額に手を当てた。

「？」

ラフラが困惑した表情を浮かべている。

【少し、眠れ・・・】

困惑しているラフラに静かに言った。すると、強烈な眠気に襲われ
たように、眠りに落ちた。

ラフラは崩れ落ち、床の上で寝息を立て始める。

スウアルツはラフラを抱えて、ベッドに寝かせる。

「記憶は見たか？」

【ああ。ヴァイスの王のいる部屋も分かった】

シュトリアはそういうと歩き出し、部屋を出た。

スウアルツはそれについて歩く。

二人は途中で人にすれ違ったが、その者もラフラと同じように寝息
をつき始める。

そして、それはリダラの部屋に着くまでに何度も起こった。

「ここか？」

スウアルツは扉を見つめ、聞いてくる。

【ああ】

シュトリアは頷く。

「入るぞ」

スウアルツはそういうと扉を開けた。

中ではリダラの手を握っている女がいる。

「誰？」

その女は振り返り、二人を睨む。

「お前は？」

スウアルツは声を低くして聞いた。

【ヴァイスの王の妻だ】

質問に答えたのはシュトリアだった。

「そうよ。あなたたちは・・・シュトリアの王様と、シュトリアの神呪？」

【お前、心読みの者か】

シュトリアはファムを見据えて聞く。

「ええ。そうよ」

ファムは依然、睨み続けている。

【ならば、我らが何しに来たか知っておろこ】

「やっぱりそうなのね。・・・どうか、どうかこの人を助けてあげて。この人が消えれば、この国にある杭が暴れかねない」

ファムは睨んでいた目を優しくし、リダラを見る。

【やはり、その者はもう杭の生贄になってしまったのだな】

シュトリアが無表情で言う。

「ええ。この人が前王を倒す前に身を捧げた」

ファムは悲しそうな表情でリダラを見つめる。

スウアルツは話分からないのか黙ったまま動かなかった。

【・・・】

シュトリアは黙った。

「そんなことよりも早く、この人を」

ファムはリダラから離れる。

シュトリアは頷き、リダラの胸辺りに手を当てる。

【王】

「ああ」

スウアルツはシュトリアの短い言葉に、承知したように頷いた。

そして、スウアルツは深く息を吸い、長く吐き出すと魔呪を唱え始めた。

それに合わせるようにシュトリアも唱える。

『彼の者に安息を。彼の者に祝福を。彼の者に死を。彼の者に生を。彼の者に力と命を。我は乞う。彼の者の生を奪い死という安息を与え、彼の者の死を奪い生という祝福を与えよ。そして、彼の者の血を用い、力と命を与えよ。聖なるハイラハドムに生まれいでし、魂に白の恩恵を。』

二人が唱え終わるとリダラの体は黒く光り、その後に白く光った。そして、シュトリアが手をどけると、リダラが強い鼓動を打ち始めた。

それを見ていたファムは泣きだし、崩れ落ちた。

「なんとか、成功したな」

スウアルツがホツと安堵した。

【ああ。あの者のおかげでな】

「あの者？」

スウアルツが疑問に思っていると、シュトリアが一点を見つめて動かないことに気づいた。

「どうした？」

スウアルツがシュトリアの見ているほうを見ると、リダラの上に浮いて座っている人物がいる。

【相変わらずね。シュトリア】

リダラの上に座っている人物は美しくも残虐性の帯びた笑顔を浮かべる。

【お前こそ。ヴァイス】

シュトリアは睨むようにヴァイスと呼ばれた人物を見る。

【ふふふ。それにしてもあなたが私の国の人間を救うなんてね。どんな風の吹き回し？】

ヴァイスは口元に手を当てて笑いながら問う。

【ふん。王が救えというから救ったまでだ。本来ならお前が救うべきだろう。武と創造を司るお前が】

シュトリアは吐き捨てるように言う。

【確かに私が救うべきだったわね。でも、この国の人間は私を逆呪文で唱えたことはないから、確実に失敗してこの子は死んでいたでしょうね】

ヴァイスはそういいながらリダラの顔を撫でる。
今、リダラは寝息を立てて眠っている。

それも、リダラだけじゃない。ファムもスウアルツもだ。

【はあ。お前は昔から・・・】

【変わらないわよ。強いて変わったことといえばハイラハドムが選出したって言うことかしら？】

ヴァイスは考えるように顎に人差し指を当てて、上を向いている。

【もう。そんな時か？】

シュトリアが苦い顔でリダラを見る。

【ええ】

ヴァイスは頷き、リダラの上から降りる。

【これで我らの役割も終わりという訳か】

シュトリアが感慨深げに眠りにについているスウアルツを見る。

【いいえ。始まりよ】

ヴァイスは声を強くして言う。

【始まり？】

シュトリアがスウアルツから視線を戻す。

【ええ。これは始まり。私たちを創った神と私たちの主である人間の戦いの始まり。私たちは神の子でありながら人間に与さなければいけない。それが私たちの本当の役割】

シュトリアはまた苦々しい顔でヴァイスを見る。

【ヴァイス。それは子が親を殺すということだぞ？】

【そうね。でも、それを神は望んでいるのよ】

ヴァイスはそういってどこかを見つめる。

【・・・】

シュトリアは黙り、俯く。

【・・・あなたにも人間と一緒に戦ってもらわね。あなたは私の中

で私に力を貸し、この王に力を与える。今、私の中には今までヴァイスが攻め落とした国、同盟を組んだ国の神呪がいる。あなたもその一人になる】

ヴァイスが悲しそうな顔でシュトリアを見る。

【本当はあなたもみんなも取り込みたくはなかった。でも、そうしないといずれこの国にある杭は抜けて、世界が滅ぶ】

【・・・なぜ、ヴァイスなのだ？　なぜ、ハイラハドムの血が一番薄くて、ハイラハドムに申し訳程度に杭守りに命じられただけのお前なのだ？】

シュトリアは少し嫉妬混じりの声で言う。

【それは・・・私自身がハイラハドムの血を継いでいるというわけじゃないから。ハイラハドムの血が一番濃く継がれているのはこのリダラよ。そして、一番濃い血を持つリダラがハイラハドムに選ばれた。この子を主とする私がすべての神呪を取り込むことも必然。

だから、どうすることもできない。出来ることは神呪を全て取り込んで、この子に力を与えて、神と対峙させるということ以外ないわ】
ヴァイスは自分にシュトリアの嫉妬の視線が当たっているのを真摯に受け止め、シュトリアを真剣な眼差しでみつめる。

【ふざけるな。たかが人間がハイラハドムの血を継いでいるわけがないだろう。ハイラハドムの血を継ぐことができるのは我ら神が創ったものだけだ】

【人間も、神が創ったものよ】

ヴァイスは一言で全ての理由になる言葉を言った。

【人間が・・・我らと同じ・・・？】

シュトリアは絶望したような表情で頭を抱える。

【そうよ。シュトリア。なぜ、ハイラハドムがあなたを選ばなかったか教えてあげるわ】

シュトリアは目だけをヴァイスに向けた。

【あなたは生まれたときから人間を自分より下の存在だと思っていた。だから、あなたには事実が伝えられていなかった。シュトリア

以外の神呪はみなこのことを知っていたわ。あなたはそんな性格から自分の選んだ者にしか従わない。もし、あなたが私の立場だったら自分の中にある無限の力に飲まれてあなたはこの大陸、ハイラハドムを殺していた。そうすれば連鎖的に他の大陸も死んでいく。それを防ぐためにあなたには事実を伝えていなかった】

【・・・他の神呪は取り込まれるときなんと言っていた？】
シュトリアはヴァイスに顔を見られないようにヴァイスに背を向け、聞いてくる。

【・・・ありがとう。これで元の私に戻れる。これでハイラハドムと愛する人間たちを救うことが出来る。この時が来ることは分かっていた。・・・お前に辛い役目を背負わせてすまなかった。取り込まれた俺たちはお前を見守ることしか出来ないけど、どうか力に、神に、負けないでくれ】

ヴァイスは涙を流しながら言葉を紡ぐ。
シュトリアは背後の嗚咽を聞きながら考える。

【・・・我はまだ知らないことがあるな・・・？】
シュトリアは小さな声で問いかけ、横目でヴァイスを見る。

【・・・】
ヴァイスは無言で頷く。

【それはなんだ？】
【それは・・・】

ヴァイスが言うのを躊躇うように口を閉じる。
【言ってくれ。もう、お前に取り込まれることは受け入れよう。だが、まだ何も知らないまま取り込まれるのはごめんだ】

シュトリアが振り返り、ヴァイスの顔を見て微笑みかける。
ヴァイスは見たことのない優しい笑みに頷いた。

【・・・神と対峙してこの子が勝ったら私の中にいる神呪は人間に転生する。そして私は存在が変質して第二の神になる。第二の神になった私は記憶も何もかも無くして、神の城で、ただ一人終焉が訪れるまで世界を見つめながら眠りにつく。そして、終焉が訪れれば

私は眠りから覚め、世界を滅ぼそうとする。そして、また人間に倒されて、第三の神が生まれて私と同じになる。人間に倒された神は神の大地の一部となり転生することも、動くことも出来なくなる。これを今までずっと続けてきた。だから、私の中にいる神呪は私の心配もしてくれた】

ヴァイスは悲しく俯く。

【・・・そうか。お前は我らより辛い役目を命じられたか】
シュトリアはヴァイスのその辛く重い役目選ばれた悲しさを知った。

【でも、大丈夫だ。我らがお前の中でお前を最後まで支えてやる。出来ればこれで最後にしたいがな】

シュトリアはヴァイスを見て、悲しそうに微笑む。

【・・・】

ヴァイスは無言で頷く。

それにシュトリアも頷き、

【じゃあ、我は素直にお前に取り込まれよう。これがお前と話す最後かも知れんが、この世界の命運を任せたぞ】

そういうと、シュトリアはすうつと消えていった。

【うっ・・・もう・・・私・・・以外、みんな・・・いなくなっちゃ・・・た】

ヴァイスはたくさんの涙を流して、悲しむ。

その時、優しくて温かい手がヴァイスの頭を撫でた。

ヴァイスは振り返り、その撫でている人物を見る。

いつの間にか起きたリダラが微笑みながらヴァイスの頭を撫でていた。

「大丈夫だ。他の神呪はいなくなったわけじゃない。お前の中にちゃんといる。それにお前は一人じゃない。俺やファム、ラフラ、この国の人間全てがいる。だから、大丈夫」

リダラは泣いているヴァイスを宥めるように抱きしめて慰める。

ヴァイスはリダラの優しさに触れて、また泣いた。

今度はこの役目に耐えるための最後の涙だ。

【ありがとう。リダラ】

ヴァイスは涙を拭いながらリダラに礼を言う。

「いいや。ヴァイスの王なんだから、慰めるのは当たり前だろう?」
またリダラは微笑む。

それに今度はヴァイスも笑う。

【それじゃあ私は帰るよ】

ヴァイスはそう言うと霧のように消えていく。

それをリダラは見送る。

ヴァイスが完全に消えるとリダラの表情が鋭くなる。

「・・・この役目を背負うのは俺一人で十分だ」

リダラはそう言うと床で寝ているファムとスウォアルツを抱えて部屋を出る。

第四節 1話

リダラが見つかって一週間が過ぎた。

ファムはリダラの部屋で目が覚めた。

目が覚めたとき、リダラはソファの上で眠っていた。

目覚めたファムはすぐさま起き上がり、寝ているリダラに抱き着いた。

リダラは抱き着かれた瞬間、変な呻き声を上げた。

「リダラ！」

ファムはリダラに泣きながら抱き着いている。

リダラは状況を把握して、ファムの頭を撫でる。

「ごめんな、心配かけて」

ファムはコクコとリダラの胸に顔を埋めながら頷く。

その時、扉が勢いよく開いた。

そこに目を向けると、ラフラが半泣きの状態で立っていた。

「・・・ラフラも悪かったな。急に俺が消えて」

リダラはラフラに優しく微笑んだ。

「い、いえ・・・」

ラフラは袖で顔を覆った。

リダラは今、目の前で泣いている二人を見て柔らかく微笑んだ。

「ただいま」

リダラは優しい声でそう言った。

二人は顔をあげて、

「お帰りなさい」

と答えた。

リダラとファム、ラフラは笑いあった。

その場には優しく温かい空気があった。

だが、次の瞬間リダラの周りだけ冷たく冷え切ることになる。

「さあ。陛下が帰ってきたところで今まで出来なかった戴冠式と結

婚式をしましょうか」

と、ラフラが皮肉げな笑みを浮かべて提案する。

「そうですね。やりましょう！」

ファムは賛同する。

だが、リダラはそれに猛反対した。

「嫌だ！」

その瞬間二人の痛い視線がリダラに当たる。

「結婚式はいいが、戴冠式は勘弁だ」

リダラはそういうとジリジリと後ずさり、ソファから落ちる。

「陛下！　いつまでそのようなことを言うつもりですか！」

ファムは落ちたリダラに追い打ちをかけるように言葉を煽る。

「いい加減大人になってください。あなたはもう死ぬことが許されない身なのですよ！　王になるためにはまず最初に戴冠式をするのが通例です、わかっているのですか！？」

「そうですね。陛下。今やらずに後伸ばしにすると一層、やりづらくなってきましたよ？　それにあなたは長い間、民を待たせた上、心配させたんです。だから、この機に陛下の元気なお姿を披露してはどうです」

リダラは重なっていく言葉に逃げ腰になっていく。

「お、俺は絶対に嫌だからな。そんなに言ったって駄目だぞ」

その言葉にファムが目には涙を溜める。

「陛下・・・ファム様を泣かせるなんて・・・。あなたも落ちましたね」

ラフラはファムを慰めながら、リダラを虚ろな目で見つめる。

「うっ・・・」

リダラの心は徐々に折れ始めている。

それに気付いたラフラとファムは一瞬笑い、続ける。

「陛下はこの国の王にはなりたくないというわけですね・・・とても・・・とても、悲しいです」

ラフラは泣くように顔を服の袖で隠す。すると、肩が震え始めた。

実はラフラはリダラに見えないように笑いを堪えているだけなのだが、それがリダラには泣いているように見えたらしく、オロオロとしている。

「陛下・・・ファム様のためにも、民の為にも戴冠式に出てください・・・」

ラフラはリダラを戴冠式に出すための最終手段に出た。

「うっ・・・」

リダラが承諾した。

その瞬間、ラフラとファムの口から笑い声が聞こえた。

「あはははは！」

「うふふふ・・・」

二人は笑いを堪えきれず笑い出した。

その姿にリダラはキョトンとした顔になる。

「な、何だ？ 何で笑う？」

リダラは怪訝気味に聞く。

「陛下。気付かなかったんですか？ 今までの陛下を戴冠式に出すための演技だったんですよ」

ラフラは笑いながら暴露する。

それにリダラは顔を真っ赤にして怒りを表す。

「お・ま・え・らあああ！」

リダラはそう言って、ラフラを追いかけ始める。ラフラは嬉しそうに笑いながら逃げ回る。

それをファムは笑いながら見ていた。

追い掛け回しているリダラも、追いかけられているラフラも、見ているファムも心の底から嬉しそうで楽しそうだった。

ファムが一通り笑い終わると、

「さあ、陛下。戴冠式と結婚式の準備をしてください。会場の準備はとつくに終わっていますから」

と、リダラに微笑みかける。

いつもは天使の微笑みも今のリダラには悪魔の微笑に見える。

リダラは冷や汗を浮かべながら頷く。

ラフラはそれを見てまた笑う。その瞬間、リダラに睨まれたが受け流した。

リダラとファムは衣装室に向かい、ラフラは賓客を呼びに行った。

最初に執り行われるのは結婚式となった。

結婚式は城の庭で国民全員に見えるように行う。

リダラは戴冠式用の衣装とは違い、白い軍服のようなタキシードを着て扉の前に立つ。

ファムは純白のシルクで出来たドレスに身を包み、神父の前でリダラが来るのを静かに待っている。

ラフラやリダラの部下からスウアルツまで結婚式に出席していた。

リダラは扉の前で深呼吸をして、扉を開けた。

城の庭にはたくさんの人々と白い花があった。

ファムはその白い花に包まれるように微笑んでリダラを待っていた。リダラははにかみながらレッドカーペットの上を進む。

リダラが一步步くたびに民や兵から歓声上がる。

時々、その歓声の中に冷やかすような言葉があるが、リダラはあえて無視しながら進んだ。

リダラがファムの元に着くと、歓声は止み、神父が言を言う。

「汝、彼の者を生涯の伴侶とし、生涯ともに歩み寄っていくことを誓うか」

それにファムが答える。

「はい。誓います」

ファムは胸に手を当てて誓う。

「汝、彼の者を生涯の伴侶とし、生涯護り抜くことを誓うか」
それにリダラが答える。

「はい。誓います」

リダラはファムの前に跪き、胸に手を当てて誓った。

「汝らはハイラハドムの名の下、永久に契りを交わし、裏切らない

ことを誓うか」

二人は同時に、

『誓います』

それに神父は頷き、

「ハイラハドムとヴァイスの女神の加護の下、汝らの契りは交わされ、永久に破られることはない。汝、契りの証として血を。汝、契りの証として涙を。このハイラハドムの土とヴァイスの水で作られた盃に捧げよ」

リダラは司祭から短剣を受け取り、その短剣で指先を切って、血を盃に入れる。

ファムは今までの悲しいことを思い出し、涙を流した。その涙を盃に入れる。

一つの盃の中で血と涙が融合し、二つのものを形成する。

一つは首飾り。

一つは腕輪。

神父はそれを取り出し、それぞれに渡す。

リダラは首飾りを受け取り、ファムの首にかける。

ファムは腕輪を受け取り、リダラの手首につける。

首飾りは護りを示し、腕輪は攻めを示す。

首飾りと腕輪を互いにつけあうことには意味がある。

首飾りをつけたものが祈れば、腕輪の者が護られる。

腕輪をつけたものが祈れば、己の力が増し首飾りの者を護る力を得る。

「この盃によって、破られることのない契りは完成し、汝らをハイラハドムとヴァイスの女神が護ってくださいるだろう。汝らは神の加護を受け、汝らの子は生来幸せに過ごすことができるだろう。これにて、汝らの婚姻の儀は終了する」

神父が優しい顔で言い終えた途端、歓声が上がった。

白い花が舞い、花火が打ち上げられ、国を挙げて二人を祝福した。

リダラは恥ずかしそうに顔を赤らめ、ファムは嬉しそうに顔を赤く

しながら笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8855w/>

God and World

2011年11月27日03時49分発行